かないが爲に妨げられ、遲延するに至り、又失敗に歸するのである。

神は御自分の計畫を失敗せしめ給ふ。之は彼の大なる點である。神は人に行動の自由を全然ゆるし給ふて其計畫を失敗せしめ給ふのである。神は、人々が之によりて己が失敗を知り、喜んで神に立ち歸らんが爲に其人の生涯を破滅に至らしめ給ふのである。幾多の山は溪谷を辿つて初めて登らるゝのである。

神は計畫よりも人のことを深くかへりみ給ふ。計畫は只人の爲である。諸君はそれは勿論だといはるゝだらう。さりながら諸君が知らるゝ通り多くの人々は自分等が目論だ計畫を遂行することばかり考へてそれが他人を傷けようと亡ぼさうと少しも意としない。神の御計畫は人の爲である、それであるから人の爲に之が失敗に終ることをゆるし給ふのである。

併し計畫はいつも人の爲であるからして、又やがて人がそれが最良の途であるを覺るからして遂に成就するのである。幾多の人の品格は其人の生涯の破滅によりて始めて造られる。若し神が其御心のまゝをなし給ふことが出來たならば、彼は人の生活と、魂と、此世の生涯と、天につける品格とを救ひ給ふたのであらう。

暫く心を平かにして、神は人の爲め、吾等銘々の爲めに念を入れて案出された御計畫を持ち給ふといふことを記憶したいものである。それは此地上に於ける生涯の計畫である。單に吾等が此世に用なきものとなつてから往くべき場所であると考へられて居る天國のそれではない。

それは最良の計畫である。何故かといふに神は吾等の爲に大なる望みを懷き給ふ、之を信ずる者は殆んどないが、吾等が自分々々の爲に

大望を懷くよりも、神は諸君の爲に、予の爲に、更に大なる望を懷き給ふのである。神は其計畫を遂行し給ふ―然り神は吾等の心からの同意を得て始めて之を遂行し給ふのである。神は吾等の意志を通じて働き給はねばならぬ。此點に於て神は吾等を尊重し給ふ。最大なる敬虔の念を以て斯く云ふてよからう、神は人々の意志といふ戸の外に帽子を手にし立ち、人が彼を迎へ、彼をして其計畫を遂行せしめんと戸を開く迄待ち給ふと。吾等は彼と共に働かないで、神をして失敗に歸せしむることが出來る。一切の成功の最大なるものは神の計畫を發見し之と一致することである。

教會の使命

神は御自分の教會に就いて計畫を立て給ふて居る。其計畫と云ふ

は單に此丈の事である、即ち教會は神の使者であつて天下の萬民に遣はされたものであると云ふこと。疑ふまでもなく其他にも極大切な樣々の事が教會に委托されて居る、即ち禮拜の如き、會員の訓練と其發達との如き是である。さりながら此等は萬民の福音を宣傳すると云ふ事に比して正しく第二位に屬するものである。

此主位に屬するものと第二位に屬するものとの兩者は互に相織込まれ相依存するものである。併し必ず重要な目的が存して居る。其重要な目的は申までもなく、普く全地に耶蘇の福音を宣べ傳へるといふことである。如何なる時代に於ても神の重なる御計畫―他のものは皆之に從屬すべきものであるが―は萬民をして耶蘇に關する震天動地の物語を充分に且つ心をよせて、聽かしむべき事であつた。

其計畫が失敗したといはふか。そんなことはいふも心痛の至りで

ある。予は教會が失敗したとはいはぬ。さりながら諸君が教會につける神の御計畫に注意せられ、心のうちに諸君御自身の正直な答を與へられんことを願ふ。

又其答を爲すに當りて記憶すべき實際的の點は之である―即ち教會とは君の事である。私が教會である。若し予が、教會が失敗したといふならば自分が失敗したことをいふのである。予は予がそれに關係して居る範圍内に於て失敗を防ぐことが出來るのである。予は教會に關して抽象的に、又學理的に、問ふのではない、只私が教會の一部分となつて居るといふだけの事を問ふのである。

年に一回若くは三四回發表さるゝ教會の報告に於て、數多の紙葉が教會の財産に關して費されて居る。勿論其財産は働きの指針である

といふのであらう。吾等が主にどれ程忠實であるかを示さんが爲に此世の標準とする所のものを使ふは少しく奇異に見える。勿論それは此世の人々が最も早く且つたやすく了解し得る道を取つて、此世の人々の目に觸れ易からしめんが爲に使はるゝのであらう。

教會は莫大の金と財産とを有する富める一制度となつたが、之は主の御考へではなかつた。主の御考によれば教會の力と忠實とは全く萬國萬民に彼を知らしめ、又彼等を導いた其程度によりて知らるゝものであつた。若し教會の過去の歴史並びに世界の現在の有樣を少しく考ふるならば、教會に關する其心苦しき問に對して失敗であつたと答へざるを得ない。

諸君の多數は教會の勝利のことや、教會が世界の生命に及ぼす所の朽ち果てざる、計り得べからざる感化力などに就いて考へて居らるゝ

ことを予は知つて居る。そして予はいつか外の時に心から其事に就いて諸君に賛同の意を表さう。併しながら吾等は今其ことを話して居るのではない、只教會歴史の一個特殊の事實を考へて居るのである。一遍に一つの眞理を語るは眞理の全部を判然と心に浮ばしめ、手に取るが如く感せしむるものである。

私は次の歌を愛する

『あななつかし　命をもて
あがなひ給ひし　主の御殿や。』

吾等は教會の感化がなかつたならば世界の過去は如何なるものであつたらうか、之を考へやうとする丈でも戦慄を催さゝるを得ぬ。

さりながら現在吾等は外のことを話して居るのである。予は諸君に静かに次の事を御尋ねしたい、若し教會に就ける神の御計畫は、教會

を神の使者として萬民に遣はし給ふたものであるとするならば、諸君が過去十九世紀間のことを考へ、又今日世界の道徳上の狀態を考へて、其御計畫が成功したといはるゝであらうか。或は又——。

『基督も亦待ち給ふ。』

茲にあの基督の再臨に關する、議論の多い問題に幾分か光を與へるものがある。記憶せらるゝ通り主はいはれた、吾等は主の再臨を待たなければならぬと。さりながら多くの人は問ふ、彼が吾等に待てといはれてから二千年にもなるが、今日それは益遠いことの様に思はるゝ、然るにどうして待つことが出來やうかと。

予は記憶する、聖書の組に於て或日の課業は路加傳十二章の主の再臨を待つ所であつた。其組のある人々はそれは絶えず期待の態度で

彼の再臨を求めて居るといふ意味であるとの考であつた。然るに熱心な信仰の深い年老いた退職の教役者がいふた、『どうしてあなたは二千年の間待つて居る事が出來やうか』と。

さりながら基督御自身の敎へ給ふ所に依れば彼の再臨は信者が、或定められた事を成就すると云ふ條件に由るものであるをよく注意していたゞきたい（馬太廿四ノ十四）。即ち萬民が遍く耶蘇の事を聞いた時に基督は再臨し給ふて更に彼の御計畫を成就し給ふといふのであつた。されば若し吾等の方でなすべき分を盡くさなかつたならば、從つて彼がなし給ふ分も後れるは明かな事である。されば萬民に耶蘇の事を話すといふことゝ、基督の再臨に當つて生起する事柄とが密接な關係を有する樣に見える。

吾等の同志の友のうちには、主がいつ歸り來り給ふかと、其日の計算

に汲々として居る人々もある。その中の或人々は曆學の達人のやうに見える。彼等は正確に其時機を斷定することをも敢えて辭さぬ。彼等は主が『意ざる時に人の子きたらん』といはれたる言葉を忘れたのであらう。若し諸君が或一定の時に彼が來り給ふと思はゞ、一つの事は確であるそれはその時に來給はぬといふことである。

吾等人間が持て居る唯一の曆は日月の運行に合せたる月日の曆である。然るに神が持ち給ふ曆は月日のではなく、出來事の曆である。神の御計畫の完成は太陽の周圍を地球が幾回運行するかといふ事にはよらないで、寧ろ彼の歸依者等が人々に耶蘇の事を語りながら地球の周圍を忠實に運行することによるのである。

されば吾等が與へられたる準備的の分をなさなかつたが故に、主の來臨と彼の計畫とが遲延したやうに見える。

『ちよろづのものを、新にする
光を待ちぬ、心安からぬ萬民は。
基督も亦待ち給ふ。人こそ遲かれ。
我等は爲すべきをなしたるか？　我は？
汝は？』

『何人かゞ忘れる』

或大きな都市の細民部落に住める極く貧乏人の子供が勸められてミッションの日曜學校に出席する樣になつた。やがて、先生の忠實なる働きの結果として此子供は基督者になつた。彼は其新しき基督教の信仰と生活とに於て至つて幸福に心安らかに見えた。

或る人が考へなしに問ひをかけて、彼の單純なる信仰を試さうとした。

そして問ふていふには『若し神樣がお前を御愛しなさるならばなぜもつとお前を御世話なさらないのか。何故神樣がお前に温かな靴と石炭とおいしい食べ物とを贈る樣に誰にかお話にならないのだらうか。』

小さい子供はしばらく考へ、目に大きな涙を浮べていふた、『たぶん、誰かにお話になりますが、誰かゝ忘れるのでしよう。』

此子供は、知らずして、教會歴史に於ける痛い所に手をふれた。それが諸君に取り又予に取りて痛い所であらうか、どうであらう。

將來の勝利

失敗は勝利に併呑さる
改正の傳道標語
優れども、尚劣れり
急流に棹して
指導の力
少數者運動
世界的合唱
勝利の聖樂

將來の勝利

失敗は勝利に併呑さる

神の失敗は一時的に過ぎないが、現實たるを失はぬ。それに悲劇的の要素がある、されば神の此なつかしき聖書全體に亘りて失望の至つて悲むべき色彩が見える。併ながら其失敗は一時のものに過ぎぬ。諸君が實際其ことに干與つて居れば頗る永き歳月の樣に見えやう。されど歳月は駸々として進み、最後に來るものは勝利である。神の勝利は偉大にして途中に遭遇したる失敗を全く忘れしむるに足る。

エデンの計畫は一寸した計畫ではなかつた。それは終局の出來事の豫言であつた。聖書は失敗を以て始まり、薔薇色を以て彩色された大勝利の燦然たる繪畫を以て終つて居る。エデンに於ける美と幸福

とのあらゆる方面の事物はヨハネの默示錄に於て發展の絕頂に達して居る。茲に樂園生活の簡易及び淸淨と、都市生活の特徵たる進步及び勢力とが結合されて居る。今や此處に生命の川がながれ生命の樹は成長して鬱林となつた。

神は未だイスラエル國民と緣を絕ち給はぬ。ユダヤ人は捨られた民ではない。今日天下何處の果に於てもユダヤ人は神の御計畫の記念として見出され、彼は又到る所に於て神の御目的が將來成就さるゝ豫言となつて居る。ユダヤ人の奇異なる種族的不滅は、如何なる立場から見ても一個の謎である、但し神の立場は別だ。人々はユダヤ人を殺し盡さんとして止む時がないが、彼を殺し盡すことは出來ぬ。ユダヤ人は、過去幾多の時代に於けるよりも、今日益其數を增して居る。

國民的存立を再現せんとする、現在に於ける奇異にして不撓なるユ

ダヤ的渴望は何を示すかといふに、つまり幾百年の失敗の後に神の御計畫が將來に於て勝利を博するといふことを示すのである。而して現在の潮流は干潮の如く見るも、それは更に新にして更に盛んなる奔流とならんが爲であらう。神の御計畫が成就せらるゝに當つては、世界は國民的生活並びに世界的の勢力を賴としない—全然新しき觀念を持つに至るであらう。斯くの勢力を賴とし—而も陸海軍や其他何等外形上て萬民は其幸福を享有するを得るであらう。

ソール王は失敗したが、はや紅顏のダビデは群羊の間にその身に己が國民最大の王者たる資格を備へて、膏そゝがるゝを待つて居つた。

耶蘇の弟子ユダは始の約束を履行しなかつた。ユダが醜惡の最高レコードを作つた時、はやパウロは其血統と其學究的修養とによりて使徒となるの準備をして居つたのである。されば一度主の御手が親

しく彼に觸るゝや、彼は直ちに立つて傳道事業に於ける敎會最大の指導者となつた。若しユダが最低の音譜を押したとすれば、パウロは耶蘇に對し又耶蘇の世界的至情と經綸とに對する忠烈の最高音譜をかきならしたのである。

敎會は目を醒した。記憶せらるゝ通り、予は前にかういふた、若し諸君がペンテコステの敎會誕生の日から今日に至るまでの其歷史を通覽し給ふならば、敎會に委ねられたる肝腎な使命は大部分忘れられたといふ悲むべき事實を發見さるゝであらうと。それを成就するよりも忘るゝ方、怠る方が却て多かつた。

さりながらよく注意すべきことは、過去に於けるいづれの時代に於ても、福音宣傳の理想は決して失はれたのではなかつた。されば何の時代にも敎會の大使命を遂行せんと忠實にして怠らぬ人々は存在した。どんな暗い日でも燦爛たる光明を幾分か持たなかつたゝとはない、殊に四圍が暗い丈、其光輝は一入熾に見えた。

改正の傳道標語

然るに吾等がかうして話して居る間に、敎會歷史の新しき一章が書き記されて居る。それは十八世紀の晩年に書き始められたのであるが、其一章はまだ終らない。其内でも極よい部分が今筆太にかゝれて居るのである。

其始まりは至つて平凡な筆で書かれた。ウイリヤム・ケレーの靴修繕所が警鐘樓となり、彼が打鳴らしたる卒直の言は敎會を覺醒し始めた。斯くて敎會は委ねられたる使命を成就せんが爲に爲すべき最大の事業に對して起き上り、身を震ひ、帶をしめ直したのである。

百年前に神はニューイングランドの一古村に於ける數名の青年大學生の胸中に火を燃し給ふた。世界の悲慘なる要求は夜晝彼等に迫つた。さりながら彼等は數に於て少なく、齡は若し、名も知られて居らなかつた。而もその事業はと云はゞ非常に大いなるものであつた。

或日曜日の午後、大雨に追はれて彼等は乾草の堆塚の隱家に入り、更に世界要求の風雨に追はれて祈禱の隱家に入り、更に又追はれて大經綸の隱家に入つた。彼等は神に對する單純な信仰と、等閑にされた大事業に對する强烈なる奉仕の念とに充たされて敎會に向つて絶叫した

『吾等が爲やうとせば出來る』と。

其百年後に同一地點に於て敎會が集つた。今や敎會は覺醒した。永い間遠い外國に働いて居つた人々と內國の人々とが相會合し、過去の事を語り、更に多く、現在の事と將來の事とを談じた。そこで彼等は

百年來の標語を改正したのである。ウエストミンスター寺院のエルサレム室に於ける諸學者の集合であつても、之以上の改譯事業は出來まい。彼等はいふた『出來るから、吾等は爲やう』と。乾草の堆塚に集れるあの忠實な少數の團體を記念するに當り、此改正標語よりも更に大いなる頌辭はなからう。

青年大學生の大膽なる叫は基督敎會內に響き渡り、敎會は之を聞いて起き上つた。敎會の近世宣敎運動は敎會歷史の過去百年間に於ける最も目醒ましきものである。當今の敎會は其宣敎的活動に於ては初代敎會をも凌ぐといふてよからう。つまり吾等は或特殊の點に於ては彼等に勝つて居るのである。

第一世紀の宣敎的熱心は通例人々の稱揚する所である。主の親しく御手を觸れ給へる初代敎會は主として宣敎的敎會であつた。彼等

は一大目的を捕へ、之が爲に全身を傾注した、即ち到る處に耶蘇の音信を傳へんことを努めた。斯くて彼等は到る所に往つた。吾等はパウロが希臘、羅馬の世界に試みたる旅行の概畧を知つて居る。然るに此聖書の一卷となつて居る使徒行傳の外にも、確かにもう一つの使徒行傳があつたのである。實に彼等は之等の初期に當り、地球の遙遠なる地方にまで往きて福音を宣傳し、人々を導き、基督教會を建設したのである。

近世運動の大さは疑もなく遙かに初代の運動にまさつて居る。諸方の傳道地に在る人々の數と亞米利加、英國、並びに歐洲大陸の國々が年々捧ぐる所の金額との多大なるはとても初代教會の企て及ぶ所ではない。

組織の整然たる永續的要素の存する、用ゐらるゝ方法の種々なる、例へば病院、學校、文學、及び勞働の補助機關の如きに於て恐らく現在は、遙かに初代の運動に勝つて居る。教會の指導者が全世界の傳道地を政治的の眼光を以て、研究して居ること、困難と失望との存するにも拘はらず年々其運動を確實に進めて居ること、又本國教會の傳道上の知識を增し又傳道の精神を喚起せんが爲に秩序的努力を爲しつゝあること——之等は皆現今に於ける外國傳道事業の特徵である。實にこれは思慮ある傍觀者をして感歎を禁じ能はざらしめて居る。之等の點に於て現今の基督教會は全く新しきレコードを作つて居る。

優れども尚劣れり

以上の事は眞實なりとはいへ、之と同時に今日の教會は全體として、初代教會に遙かに劣て居つて、とても比べものにならないと云ふこと

も亦眞である。彼等は彼等の運動の實質に於て遙かに優つて居つて、吾等は到底肩を並ぶることが出來ぬ。其時代に於ては全教會が活動的傳道會社であつて、銘々皆往いて教を宣べた。今の時代に於てそれにやや近きものは恐らく朝鮮の土着教會の運動であらう。此外國の民は初代の精神を捕へたやうに見える。異教國にある此等の兄弟等は今日吾等の教會を鞭韃して居るのである。

それに比ぶると、現今に於ける活動は駸々として發達はして居るけれども、之に力を添へるものは至つて少數なのである。指導者等は多數者が反對の方向に引付けんとするに反抗して大膽に奮鬪して居るのである。

其當時、彼等は到る所に往つた。即ち彼等は彼等の能ふ所ならば、戸が開かれてある所は勿論、苟も又戸をねぢ開けて入ることが出來る所

ならばいかなる所にも往つた。實際吾等はもつと遠い所、又恐くはもつと多くの場所に往つて居る。併しながら吾等は未だ吾等が能ふ凡ての所に往つて居らぬ。

往くべき能力は吾等にあり、又熱心な要求は、吾等を招いて居るのであるから、未だ手を付けない幾千のところに吾等は往かなければならぬか知れぬ。若し吾等は初代教會の人々の如き勢を以て事に當らば、それは人類歷史に於ける最も大なる運動の一つとして仰がるゝであらう。吾等の少數者であつてさへも、斯る偉大なる進歩を爲すことが出來たとすれば、吾等の全體が之をなさんと意を決したならば、どんな大きなことが出來るであらうか。

急流に棹して

現今に於ける宣教運動の速力は驚歎すべきものであつて、最も熱心なる人々であつても夢にだも思はぬ程である。過去二十何年間に於ける進歩は、明かに其以前百年間に於けるものよりも大いなるものであつた――勿論前世紀の初めに於ける指導者等が据ゑつけた所の土臺の上に建設したのではあるが。

二三人の熱心なる祈りに答へて神の靈は諸大學内に聖靈の火を燃し給ふた。學生義勇宣教運動の開始の先驅者となつたものは、二三人の祈であつたといふ話は感ずべきことである。此大運動は實際祈りの苦しみの中に考へ出され、又始められたのである。それが先づ諸大學に、次に諸教會に及ぼしたる廣き感化、其初期に於ける運動、其著しき指導者等、其諸大會合、そが二十年足らずの内に及ぼしたる感化の偉大なること、並びにそれが外國に於ける傳道事業全體の上に及ぼした

所の著しき特徴などは教會の古代並に近世史上最も感動すべき一章となつて居る。今日其感化は全地球に普及し、其義勇團員は到る所に發見さるゝのである。

それが他の一運動、即ち基督教青年會の上に及ぼしたる反射的影響も亦敢えて少なくはない。此兩者は初めから相接觸し互に貢獻する所が多かつた。實に基督教青年會が實際的勢力となつて居る其價値たるや、言葉を以て表はすことも出來なければ、又明かに計算することも出來ぬものたるは、教會並びに外國諸政府の異口同音に認むる所である。

基督教青年會は外國傳道地に於て基督教會の統一的精神を表明する一機關となつて居る。本國に於ける吾等の諸教會は大部分離れ離れに働いても差閊はなからう、併しながら外國の切にして慘澹たる要

求は諸教會をして大に協同せしむるに至つたのである。あらゆる教會に屬し、凡ての教會を代表する青年男女より成る基督教青年會は、其活動上要害の地點を占領して居る計りでなく、福音宣傳の事業に於て教會に計るべからざる貢獻をなして居る。

又其溫かなる手を長く伸して居る基督教共勵會の宣教運動、並びに諸所に盛大なる攻勢的大會を開いて居る彼の更に新しい平信徒宣教運動も亦新たに興されたるものゝ一つである。

教會の婦人等は熱心なる働きと祈とに於て先驅をして居る。彼等は朝早く起きて働いた。其感化の偉大なることは到底言葉を以て表はすことは出來ぬ。今や遂に男子も亦目を醒しかけて居る、斯て新生命が教會の内に新に其形を現はしつゝある。實に男子宣教大會が到る所に於て盛大なる集會を催して其功を奏しつゝあるは教會の覺醒

を示すものではなからうか。

指導の力

人格的感化と獻身的指導との力程偉大なるものはない。一般の認むる所によれば、之等の活動を指導して居る有力なる人々が澤山あるが、其内にも殊に嶄然頭角を現はして居るものが二人ある。二人とも未だ青年であつて能力の絶頂に達して居らぬ。さりながら一人は組織的手腕の天才であつて、此點に於ては恐らくは陸軍大將にも、ジェズイト派の首領にも、又は近世の工業王にも、彼と肩を並ぶべきものはあるかも知れぬが、恐くは彼を凌ぐものはあるまい。もう一人は鋭敏なる理解力と、明晰なる思想と、人を感動せしむる辯才とを有する人であつて、此等の點に於ては彼と比肩すべきものはあるかも知れぬが、彼を

凌ぐものはなからう。二人とも卓越したる、深くしてしとやかな靈性と、指導的天賦の才能と、判斷の力と、敎會の大使命を盡すに於て眞實にして不動なる恰も北斗星の如き奉仕の情とを有して居る。

最近の宣敎的活動は此兩青年を中心として少なからざる發展を見た。今日英語を使用する二大民族のいづれに於ても、生活の如何なる方面の活動の範圍に於ても、彼等に優りて有力なる人を發見することが出來ないといふも敢えて過言ではなからう。現代の宣敎的運動は實にかゝる大人物の周圍に集中されて居るといふことは無意義のことではない。

又特別に注意してよい事は、外國傳道のこの廣大なる事業の管理を司る人々、即ち外國傳道會社の役員主事などは著しき能力と知腦とを有する人々であるといふことである。此人々よりも、更に込入つた、正

確を要する、又困難な問題を處理する人々はなからう。活動のいかなる方面に於ても之に優る外交と智慧と、堅固なる常識と、弛まざる奉仕の念とを要すること此人々に於けるが如きではなからう。

信仰の友の內に、時として傳道會社が執つて居る方法や管理などに關して批評的の態度を執る人々がある。其人々は傳道事業の枝葉の事などに口出して、斯くせば更に効果が擧るだらうと、自分々々の考から割出して彼是云ふ。之は當然の事であつて、そうでないのが却て不思議だ。さりながら之と同じ樣な批評はどんな政府の事業にも、亦どんな實業上の大事業にも加へることが出來る。人事は過を正し、改良を施し、始めて進步するものである。されど吾等が批評的の眼を開きて注意すべき事は之である、即ち吾等は髮の毛一本ほどの事で熱誠なる聲援を惜むやうな過に陷つてはならぬと云ふ事。●

苟も有力なる人にして終生の計畫を遂行せんとするに當り、二三の青蠅を恐れて其事業に蹉跌を來すものがあらうか。彼等が之を拂ひ去ることが出來ぬ場合には、之を放任するも、之をして終生の大目的を誤らしめてはならぬ。實に主が此世界に對して注ぎ給ふ熱情の火に燃されて居る人々はそんなものを眼中に置くべきではない。

少數者運動

よく注意すべきことは、之等の長足の進歩は有力な指導者に從ふたる小數者によりてなされたといふことである。基督教會全體はまだ目を醒さぬ。多數の人々は起さるゝことに手強く反對して居る。目醒時計は彼等の邪魔とする所である。時として外國傳道會社は、不思議にも、冷藏器と火爐との中間に位するものと思はるゝ場合がある。

宣教師等は傳道地から、焰えるが如き熱情を抱いて、本國に歸つて來る。彼等はかゝることを爲すによいとか、爲すべきであるとかいふ確信を有して居るから、何ら臆する所なく思切つて語る傾きがある。されば或る人々をして彼等は不愉快な火爐の如き感を懷かしむるのである。又之に反して本國教會に於ける多數の人々は冷淡なる態度を以て之を聞くのであるから、之等の歸國する男女をして氷室の冷風の如き感を催さしむるのである。されば傳道會社は、此兩者の間に於て、溫度を平均させやうとして苦心して居る。併し之は只ついでに一言したに過ぎぬ。

注目すべき大なる事實は、今日ほど宣教運動が大きくなつたことはないといふことである。又今日程廣大なる政治家的の計畫と、進取の精神と、深き奉仕の念とが一となつて教會をして其大使命に當らしめ

て居ることもない。

ロング・アイランド・サオンドといふ有名な海水浴場に於て、或る朝數千の人々が海水浴に餘念がなかつた、救命員等は不慮の禍を監視して居つた。其側に立つてゐた一紳士が救命員の一人に、助けの必要なることはどうして解るかと尋ねた。何故といふに數千人が我劣らじと騒がしくして居るので、まるでバベルの昔を思ひ起さしめる程であつたからだ。黒々と日に焦け、海風に晒されて逞くなりたる男は多年の經驗に基づいてかういふた、『どんなに騒々しくても、まさかの叫は屹度聞えます、必要な場合に私に聞えなかつたことは是迄まだ一度もありません。』

永い間、騒々しき聲は教會の耳を惱ました。然るに今や遠き海外より危難の叫びが再び明かに聞えて居る、教會も亦能く之に應答して

居る。此應答と努力との至つて熱心なるはやがて來るべき勝利の確實を豫報するものである。

世界的合唱

予は殆んど十五年前にロンドンのアルバルト・ホールに於て見た光景をあり〳〵と思ひ起す。之は基督教青年會創立六十年紀念に、世界のあるとあらゆる地方から集つた注目すべき會合であつた。凡そ二千人ばかりの人々が世界の各方面から來て出席した世界的大會であつた。剛直な英國人、世界的な米國人、慎み深いスコットランド人、頓智にたけたアイランド人、聲がよくて熱情あるウヰールス人、上品で慇懃な佛蘭西人などが居つた。

頭髪のきれいな目の青いスカンデネヴィヤ人は黒い目を有る橄欖

色の伊太利人と一所になり、着實な和蘭人と強健な獨乙人とは共に深い喉音を交へて讃美歌を唱ひ懇談をして居つた。數名の頭帕を被むつたもの、解しがたき程靜かな巴旦杏形の目を有するもの、並びに元氣ある素振と辯舌とを有する人々などは東洋に於ける印度、支那、日本を思ひ出さしめた。亞弗利加の內地より來た人々は太平洋の島々より來た人々と共に座を占めて居つた。

彼等は種々なる團體、色々なる信仰個條を代表し、又ペンテコステの日にエルサレムに集つた人々の樣に多くの異なる言葉を話した。さりながら彼等を一所に惹付たのは、そういふ異なつた點ではなく、彼等が主に於て一つであるからである。耶蘇の引力が彼等を引いたのであつて、耶蘇の御名をたゝゆる音樂が彼等の言語を調和せしめ美妙なる調音を發するに至らしめたのである。

其夜、彼等はハイド公園と道を隔てゝ立てる楕圓形のあの大きなアルバルト・ホールに會合した。ロンドン人を合せたら、無慮一萬人は居つたらう。やがてスカンデヲヴィア學生の合唱の指導で"All hail the Power of Jesus' Name,"(あまつみつかひよ　エスのみ名のちからをあふぎて主とあがめよ)を一同で唱つた時の其大音量は到底忘れられぬ。

亞米利加で唱ふコロネーションの譜ではなく、英國の古いマイルスレエーンの譜で之を唱つた。知らるゝ通り其譜は最後の行の『みかむりをさゝげまつれ』と云ふ句を四度反覆し、通例は一度毎に段々音量を增し四度目には少し靜かに重みを加へて唱ふのである。

予は今目をつぶつて、あの世界的大會を見、又あの音調の整ふた美妙な雷の如き歌を今も尙聽くことが出來る——

『みかむりを　さゝげまつれ、

さゝげまつれ、
さゝげまつれ、
ちよろづの主に　さゝげまつれ。』

之等の見聞より受けた感動は、とても他人に話すことが出來るものではない。之は來らんとする大なる勝利の日の預言を幽ながらも尙判明と不知不識の間に示されたものであつた。

勝利の聖樂

諸君は是迄默示錄の聖樂に耳を傾けられたことがあるか。音樂を好む人々は其中にある絕大の合唱を研究せんが爲めにヨハネの默示錄を學ばなければならぬ。此聖書の最終の卷の二重主調音を精査すれば驚くべきものがある。それは此事である、サタンは縛られ、基督は

冕を捧げられた。併し其四面に奏されて居る聖樂に暫く耳を傾けられよ。

先づ第一章に於ける獨唱を以て始まる。ヨハネは健筆を揮つて耶蘇の面影を紙上に活躍せしめて居る。今や彼の筆は其物語を捨てゝ唱ふ、――（默示錄一ノ五、六）

願くは我儕を愛し、
其血を以て我儕の罪を洗潔め、
我儕をして王となし、
祭司となして其父の神に、
屬しむるものに榮光と權力
世々窮なく有んことを。』

第四章に四部合唱がある。寶坐の周圍に居る四つの活物はヨハネ

が獨唱の折返に加はる。彼等が唱ふや、六組の四部合唱即ち寶坐の前にある二十四人の白衣を着、首に金の冕を戴きたる人々が之に聲を合せるのである（默四ノ九―十一。五ノ八―十）。

第五章に於て天使の合唱が始まる（默五ノ十一、十二）。彼等は四部合唱者と二十四人の長老との四圍に群集する。ヨハネは其數を數へ始めるが數は盡きてしまふ。彼は數學の達人ではないと見える。其數千々萬々（）其外幾千か數知れぬ程であつて、彼の目の達する所、右も左も、前も後も、天使の顏は洋々（）たる大海をなして居る。

調音の驚嘆すべき音量が鳴響き轟き渡つた時に、ヨハネは感極まり、畏懼を以て耳を傾けた。美妙なサブラノ、爽かなアルト、突く樣なテナー、重々しきベース。一方が唱へば、次には他の一方、相呼應して或は戻り或は進み、更に一同聲を合せて、之は實に不思議な音樂であつたら。

次に其折返を受るは**造られたるものゝ合唱**（五ノ十三）である。天にあり地にあり地の下にある凡ての生きものは引きつけられ、美妙なる音樂につられて、之に添るに自らの歌を以てする。吾等は通例動物や自然界に音樂を聯想しないが自然界の凡ての音は低音の調子であると云はるゝが、之は彼等造られたるものゝ苦しみが影響したのであらうとも思はれる。それはともあれ、彼等は他の人々の喜びに滿ちたる歌に合せて大に唱ふ。

第七章に於て一旦、音樂は止むだ樣だが、更に**殉教者の合唱**が始まる（七ノ九―十二）、ヨハネの數は又盡きてしまふ。實に彼は此合唱に加はる者の數は誰も數へ盡すことが出來ぬといふて居る。それは多國語の合唱であつて種々樣々なる言葉にて唱はるゝが悉く相合して豐か

なる調音となるのである。それは又**血を流したる合唱**である。彼等は大なる艱難を經て來たのであつて、其傷は戰の烈しかりしことゝ、信仰の堅固なりしことを無言の間に語つて居るのである。

彼等の歌を一貫して、主に低音階が用ゐられて居る。彼等造られたる者が苦痛の折々に學びたる、その不思議にも美妙なる音調は、今や彼等の心と口とに滿ちたる勝利の歌全體に亘りて一段低き調を爲して居る。彼等が唱ふに當り、天使も四部合唱者も共に伏俯して、あの驚異すべき折返しを唱ふ。

第十四章に於て潔き者の合唱が始まる（十四ノ一―五）。彼等は耶蘇の御身近く進み寄り多數の琴を彈くものと合せて唱ふ。其唱ふや一種特別の清澄なる調を成して居る。之は新しい歌である。清潔はいつも獨特の音樂を成すものであつて、美妙と清澄とに於て之に近くべ

きものはない。

勝利者の合唱は第十五章に唱はれる。（十五ノ二―四）。彼等は難戰苦鬪を經たものであつて、戰の硝烟は彼等の顏を燻ぶらして居る。彼等は接戰至つて激烈に、危く避けて强く當り、互角の勢を以て格鬪し、終に勝利を博したのである。其聲に勝利の響が鳴り渡り、銘々の琴に合せ又神の琴に合せて共に聲を張り上げて合唱するのである。

最後に**大いなるハレルヤの合唱**が十九章に聞える（十九ノ一―八）。音頭取の指導に應じて、彼等は皆其聲を一大佳調に合する。四部合唱者、二十四人の合唱者、天使、造られたるもの、殉教者、潔き者、勝利者―皆一齊に唱ふ。

ヨハネはそれがどんな風であつたかを話さうとして居る。之を話すに當り彼の心は疾くも己が誕生の都エルサレムに於ける幼き時に

かへる。即ち此都に於て幾千の參拜者が宮の境内と狹き道路とを滿たし、更に溢れて四方の山にまで及んだこと、且つ彼等の話聲と讃美の聲とが鳴り止まなかつた有樣を思ひ起して、丁度其樣であつたと云ふて居る。

さりながら、それではまだ不充分である。それ以上である。やがて彼を幽閉の地なるパトモスの孤島に目擊しつゝある怒濤の狂亂するを思ひ起し、それのやうであるといふて居る。それでも尙大音量を充分に表はすことが出來ない。そこで彼は其淋しき孤島に於て寂寞を感じたる時、頭上に霹靂一聲轟き渡りたる雷を思ひ出し、それのやうであると考へた。實にそれは、以上のものゝ凡てを合したるが如きものであつた。

さて彼等が唱ふて居るのは何であるか。なる程彼等が唱ふ歌の言

葉は色々、其聲も亦種々であるが、之等の凡てに一貫するものは先年聽いた、あのロンドンに於げる大合唱の折返である。それは――

『みかむりを　さゝげまつれ、
さゝげまつれ、
いざさゝげまつれ
ちよろづの主に。』

實にこれは吾等の凡てが唱はんとする大勝利の聖樂の練習である。

教

會

人を導く力
指導の神則
神の使者
手を世界に伸して
『足並を揃へて』
『我世界を見出して、之を伴れ來れ』

教會

人を導く力

神の造り給ひし此世界に、導く力が滿て居る。此地球運行の中心である彼の大火球は地球の生命を導く最大の力である。それは何人も計ることの出來ない、見るべからざる、しかも絶大なる力を以て絶えず地球を導いて居る。地球は太陽より逃走として居るが、いつも太陽は之を防いで居る。太陽は驚くべき引力を以て其温熱と光線と生命とを裕かに注ぐことの出來る場所にしつかりと地球を支へて居る。

太陽は河と湖水と海とより水蒸氣を呼び上げるが、地球の引力が之を喚戻すに當つてはのどかなる雨、落花の如き雪として之を返すのである。又太陽は地球の温かなる胸より、五穀と果物との豐饒なる收穫

と、地球の生命に缺くことの出來ぬ林野の富源と、美麗にして清香ある花と、吾等の歩行を易からしむる軟かなる青草の絨毯とを導き出すものである。

吾等の世界に於ける最大の導く力は神である。いづこに在りても人々は神の方に上へ上へと引かるゝ感じを懷いて居る。彼等は教會内に行はるゝ種々の會合と、信仰個條とに對し、又は教訓とか、年來の慣習とか思想の常習などに對して反抗するかもしれないが、いつも又いづこに於ても人の心は神を慕ふて居る。つまりそれは神の心が吾等を慕ひ給ふが故に人の心は之に應じて働くのである。

人も亦大いなる導く力である。いづこに於ても人々は互に惹き付けて居る。吾等銘々の内に一種の導く力があつて、人々を不可抗的に惹き付けるのである。又人生に樣々な導く力があつて吾等は銘々深く其影響を蒙つて居る。例へば吾等が幼少の頃の懷かしき住家は大抵の人々を惹き付ける不思議な力を持て居る。懷かしき爐邊とか住みなれた室など、一本の柱一枚の板に至る迄取ることの出來ない一種精微なる香氣を以て居る―之等のものゝ偉大なる引力を感じなかつた人はあるだらうか。

人の生れ國語も亦不思議な引力を有するものである。外國にありて、四面耳慣れぬ混雜の音聲を聞くに際し不圖誰かになつかしき昔の聞きなれた言葉で話掛けらるゝならば心のをどりは如何に大なるものであらう。其言葉を發した人は別に親しい人でなく又別に吾等を惹き付ける人でなくとも、只其人の發した音聲が吾等を其人に惹付けるのである。

指導の神則

偖て此古き世界を父なる神の御下に導き返さんが爲に必要なる力は何であるか、今少しく之を述べやう。此世界敎導の大事業に從事するに當り、神は吾等をして吾等が所有する凡ての牽引力を用ゐしめ給ふのである。此世界は强ひて立歸らしむべきものではなく、導きてかへらしむべきものである。人々はなるべく人を强ひんとして居るが神は招き且つ導き給ふのである。人のかへり來るや喜んで、潔ぎよく、自から進んで來るのでなければならぬ。神は此以外の方法を好み給はぬ。

人を導くに當り、吾等が勝手に使つて可い力が五つ六つある。之はいづれも偉大なる牽引力を有する極都合のよい力である。然るに其影響を妨害する所の反對の流れもある。されば吾等は之等の導く力

と反對の流とをよく知つて居らなければならぬ。

人の魂を導き、又世界を導く此幸ひなる奉仕に對して吾等が使用し得る大なる力は七つある。此等の力は敢て外國傳道の務めに特有のものではない、なぜかといふに外國傳道のことは只其必要が大なりといふ丈で其本質に於ては他の務と異ふことはない。之等のものは敎導の凡ての仕事に亘りて用ふべき力である。其中の二つは明かに人間の力である。第一は敎會といふ組織であつて、第二は敎會が成立つ所の男女である、つまり人格の力、發達せる聖別された人格の力である。

又人に倚りて働く所の神の力が二つある—耶蘇と聖靈と。之等を第二に置く理由は之等が人に倚りて働くからである。指導は人の手にある。凡ての行爲の發意は吾等人間にある。勿論諸君が少しく深く穿鑿さるゝならば發意は吾等の心を動かして行爲を執らしめ給ふ

神に存することを認めらるゝであらう。併し人間の範圍内に於て奉仕の始は明かに人間の手に存して居る、されば之等の二つの有力にして、而も全能なる、神の力は吾等を通じて働くのである。

指導に關し又指導の協同に關する神の法則は未だ明かに了解されて居らぬ。之を了解しないが爲に度々後れ勝ちになつたことがある。吾等の主耶蘇は人と爲りて此世に來り、人類に對する其大使命を盡し給ふに當り、聖靈の指導に全く自らを委せ給ふた。靈は耶蘇に倚りて働き給ふたが、此順序は耶蘇の昇天の後に顚倒された、即ち靈が崇められたる神の子の御支配の下に自らを委せ給ふに至つた。斯く耶蘇は靈に倚りて働き給ふた。ペンテコステの日に、其日に始められた特別の使命を果さんが爲に聖靈を下し給へるものは耶蘇であつた。

偖て之を考ふるに當り、吾等の心の内に極めて深き崇敬の念を以て、

此兩者は吾等人間の指導によりて働き給ふのであるといふことが出來やう。人間の間に働く場合の指導は人間の指導である。神の驚くべき靈は其あらゆる愛撫の心と力とを以て人々に耶蘇を現さんが爲に吾等の指導に倚りて働き給ふのである。

吾等人間の行爲も指導も、吾等がもし靈の導きと許しとを受くるに非ずんば何等の力もない。又之に反して、時々忘れらるゝが、忘れてはならぬことは神が働き給ふに當りては、人の行爲と指導とを待ち給ふといふことである。直ぐ思ひ起さしむる事實は教會歷史に於て度々反覆されたのであるが、人が神の招きに應じなかつた時に神の事業は廢たといふことである。之に反して熱心なる奉仕の新局面が展開さるゝはいつも新しき指導によるのである。或人は人を導くに當り、神の御聲に從ひ、全く己を神に委せ奉りて其用ゐ給ふまゝになつた。神

は人を要求し給ふ。神は諸君と予とを要求し給ふ。吾等は神の力の電流を傳達する線である。電流がなければ線は役に立たぬ。又電流が働き場所に達する爲にも線がなければならぬ。斯の如く神の力は人の行爲と人の指導とに倚るのである。力は皆神のものであるが、それが働く方法は皆人間のものである。耶蘇と聖靈とは敎會に倚り、又喜んで來る所の吾等銘々に倚りて働き給ふのである。

次に吾等人間の手中にある偉大なる力に三つの靈力又は感化力がある。即ち祈禱と、金と、犧牲とである。

神の僕者

偖て二個の人間の力の第一のもの、即ち敎會に就て一言しやう。此聯絡でいふ『敎會』といふ言葉が如何なる意味であるかを先づ

考へなければならぬ。それはいろいろな意味を持て居る。吾等が人を導く大なる力として之を考ふるに當つて茲に注意しなければならない意味は二つある。其最も廣き意義に於て、此言葉は通例敎會組織全體を引きくるめたものとして使はれて居る、即ち羅馬カトリック敎會とか、希臘正敎會とか、新敎々會とか、其外二三の古來の組織を尙持續して居る原始的の團體などの場合が是である。

又更に深い、さりながら前程は用ゐられない意味に於て、それは何處にありても苟も耶蘇基督を信頼し、彼と其目的を一つにする男女の團體を指すのである。

以上二つの意義は勿論同一でなければならぬ。耶蘇を信頼する人人は皆敎會組織の內に居るべきである。又敎會組織の內に居る所の人は基督を信頼するが故に、皆之に屬して居なければならぬ。それに

關する事實はどうあらうと兩者の使命は同一である。そして吾等が今關はる所のものは其使命のことである。

耶蘇は彼の敎會が人を導き又世界を導く大なる制度となるやうに計畫し給ふたのである。敎會の第一の使命は凡ての人に耶蘇を宣べ傳へることである。敎會は神の眞理を凡ての人に傳ゆる彼の使者である。此點に於て敎會はヘブライ民族の直系の子孫であつて又其後繼である。

此民族は使者として又た宣敎的民族として選ばれたのだ。神が彼等を民族として特別に創造し給ひたる唯一の目的は茲にあつた。彼等の特徵は他の力ある國民のそれと趣を異にして居つた。即ち神より直接に眞理の音信を受け、それを、個人として、又國民として、己が生活に體得し、斯くて世界のあらゆる民族に明瞭に且つ充分に、又愛を以て

與ふる師表的民族となることであつた。それが失敗したると挫折したるとにも拘はらず此使命は或る點まで成就された。

敎會は其後繼者である。それは猶太民族の間に生れ、其世界的使者たる使命に於て後繼者となつた。耶蘇が去り給ふ時に與へたまへる大命令は敎會終生の大事業に對する敎會の命令である。それはペンテコステの日に始まつた敎會と呼ばるゝものゝ種子となつたあの猶太人の團體に告げられたのであつた。あの鳴り渡る『遍く世界を廻りて凡の人に福音を宣傳へよ』は主が創立し給へる敎會に與へ給ひたる彼の命令であつた。それは敎會の進軍令であつて、それによりて敎會の生命は支配され、又其忠義は判斷さるゝのである。

敎會の誕生の光景は、其世界的使命の活躍たる繪畫をなして居る。それは世界的會合の間に生れ、誕生の曉より、其成立に於て、既に世界敎

會であつた。世界の各方面より來會せる人々は、其大なる誕生日に於て、神の靈の感化によりて一體となつた。其誕生の贈物、即ち多くの國國の言葉を語る力は其任務の極めて廣いものなることを既に表はして居る。

彼の教會が其時も、亦今日も、亦いつまでも世界の凡ての言葉を語り、又天の言葉、即ち愛の言葉を語るといふことは主の計畫し給ふた所であつた。斯くて人々は己が生國の言葉によりて耶蘇を學ぶわけである。搖籃の言葉、戀愛の言葉、家庭の言葉、人の心に最も早く火を燃す所の言葉、此言葉を用ゐて凡ての人に耶蘇を宣べ傳へるのであつた。之が耶蘇の御計畫であつた。教會は其誕生の日に當り、方言の賜に於て世界的奉仕に對し、人を導く力を以て、都合よく準備されて居つたのである。

勿論之ばかりが教會の使命ではない、即ち此使命の内に含まれて居る必要な他の目的がある。耶蘇の福音を凡ての人に宣べ傳へるといふことは只に之を携へ往きて語るだけのことではない、更に耶蘇に導きたる人々を教へ育てることが教會の使命として離るべからざる務めの一つである。禮拜の務めも亦教會生活の大切な一部分として知られて居る。時として之は、今も尚あることであるが、教會の唯一の使命であると思はれた。さりながら禮拜は教會の第一の使命から明かに發したものであつて、又明かに之が助けとなり、又之に從屬するものである。實に之は第一の事業を忠實になすに及んで始めて存立すべきものである。人々は先づ導かれ、それから其人々が禮拜の爲に、訓練の爲に集まつたのであつた。

手を世界に伸して

初代の教會は教會の大使命は如何なるものであるかをよく了解して居つた。主が計畫し給へる理想的の教會、又主の人格的感化を親しく受けたる人々が了解したる教會に關しては使徒行傳の初めに手に取るやうに書いてある。其當時は誰でも彼でも福音を宣べた。彼等は彼是の區別なく宣べた。又彼等はどこにでも往つた。人の往ける處であるならば彼等は實際何處にでも往つたといふ證據はかなり確である。彼等は其財産は勿論の事其生涯さへも此一大目的を達せんが爲に提供したのである。

教會の第一世紀に於ける最大の指導者にして、教會文學に最高の貢獻を爲し、又教會の生命に最大の感化を及ぼしたるパウロは就中宣教的指導者であつた。彼は實際到る處に往つた。彼は匆卒に往つたのではない、むしろ鄭重に考へ計畫を立て往つたのである。彼は人々を基督に導き教會を創立し、彼等を教へ、又他人を導んが爲に彼等を遣はしたのである。

彼は其當時に於ける世界の中心的諸大都を活動の舞臺とした。亞細亞地方の中心なるエペソ、ギリシャの勢力範圍の中心なるコリント、並びに世界の政治的中心なる羅馬は彼の最も永く又最も周到に運動をした場所であつた。之等の中心點を特に選んだのは彼が戰術上の達人であつたことを示して居る。實に之等の中心的地點は其感化を世界の極にまでも及ぼしたのである。パウロの身體はエペソか、コリントか、又は羅馬にあつても、彼の思想と心とは世界にあつたのである。

彼は異教の國土に創立したる諸教會に世界的の福音を教へ、鼓吹するに世界的精神を以てした。されば、テサロニケ、コリントの教會は人

心救濟の力をギリシヤ國中は更なりギリシヤ文明の普及した地方、つまり到る處に感せしめた（テサロニケ前一ノ八）（コリント後一ノ一）。羅馬の敎會は羅馬大帝國國道の發足點より基督の福音を遠く其國道の通ずる極までも送つたのである。敎會が宣敎的事業に活動せる時代は敎會の最も潔くして又最も有力な時代であつたといふことは、敢て驚くべきことではないが、注目すべきことである。橄欖山上に於ける主の御顏の幻像を忘れ、又彼が『爾儕往きて』と獅子吼せられたる其御聲を等閑にした時代に、敎會が書き殘したる歷史の紙面は寧ろ抹殺した方が可い。

敎會が人を導く力であつたといふことは、計算することも出來なければ又言葉を以て述べることは出來ない。今日迄成就されたることは皆敎會の活動と其指導とによつたのである。敎會は、今日導く力の

絕大なるものであつて、其溫かなる手を地球の隅々に伸ばし人々を耶蘇に惹き付けて居るのである。吾等の熱心なる祈りにより、敎會は耶蘇を萬民に傳へ、到る處に於て人々を導きて基督に至らしむる大なる感化を益々及ぼすであらう。

足並を揃へて。

敎會とは組織整然たる基督敎徒の團體を云ふ。組織は力である。敎會が神の働きを爲すに當つて力ある所以は正に茲にある。聖靈の感化を蒙り新たに生れたる男女の力は、敎會と云ふ團體を通過して、與へられたる點に向つて注がるゝに及んでは、巨大なる勢力を生ずるものである。之が實に主の計畫せられた所であつた。組織といふものは律動的の行爲であつて、多數の人々が之によつて一つとなつて恰も

一人の様に働くのである。今日程世界の人々が組織といふものゝ魔力を感じて居る時はなく、又今日程組織が最高の効力を表はして居ることもない。當今世界に於ける前古未曾有の進歩は巧なる組織的行動に基づくのである。

偖て此組織の殆んど全能力とも云ふべきものは須く世界の人々を導きて神に立ち歸らしめんが爲に用ふべきものである。ペンテコステの日に於て教會が誕生したる所以は之が爲であつた。諸種の組織が完備せる今日に於て、其内最も完備せるものは教會である。思慮ある研究者の同意する所によれば、最もよく順應し又よく完備せる人間の機關は羅馬カソリック教會であるといふことである。

若し斯の如き組織の傑作が尚便徒行傳の始め數章に於けるが如く、神の靈の支配を受けて居るならば世界を教化するに當りいかに素晴

しい、周到な、迅速な事業が出來るであらうか。之は吾等が眼中に置かなければならない目標である。全世界に福音を宣傳するは全教會に取りては容易な事である。小數の者で之を成さんとするは必ずしも不可能なことではないとしても、非常なことである。指導者等が大なる計畫と、奬勵と、熱心なる訴とによりて、今日に至るまで成したることは實に宏大な事業であつた。さりながら若し教會全體が、或は其半分丈でも、人々が他事に熱心なるが如くに、之に當らば至つて容易い事であらう。

予はある十月の朝、シンシナタ市に於て、オハヨー河にかゝつて居る古々しい橋を通行したことを記憶して居る。予が目は不圖古ぶれた掲示札に觸れた。それは筆太にたゞ斯う書いてあつた、『行列ヲ成シテ本橋梁ヲ通行スルニ當テハ足並ヲ亂スベキモノトス』と。それは

規則であるから、行列は是非足並を亂さなければならぬのであつた。多數の人々が同時に橋を渡つてもよいが足並を揃へてはならないのである。團體が歩調を揃へて歩み、多數の人々が同時に一方の足を下さば其瞬間に橋の上に加へらるゝ力は莫大なものであつて、危險の至りであるからである。一致の行動の力は殆んど計り知るべからざる程大なるものである。僅の力であつても之を一點に集中すれば豫想外の力を生ずるものである。

吾等の主は此古い橋札の文句を顚倒し給ふ。ペンテコステの日から響いて居る言葉は、『我に從ふものは皆列を作り、密集し、世界征服の爲に足並を揃へて出發すべし』と。主の此御命令は、人を導く力を極大ならしめ、世界の現在の曆を短縮し、世界の苦しみを減少し、其上耶蘇が無數の人々に與へ給ふ新生命を長くするのである。

『我世界を見出して伴れ來れ』

殆んど四十年前のことであつたが、宣教界の大開拓者の一人なるデーヴット・リヴィングストンが亞弗利加の中央で行方不明となつた。云換ふれば彼は外の人よりもあまり先きに進んだから、吾等は彼の行方を失つてしまつたのである。彼は教會が往けと命じた所に往つたのであるが、吾等は後方にさまよふて居つたのである。つまり主なる部隊は其指揮官から離れたのである。其當時誰も彼も此不明になつた此指導者の事を口にして居つた。

ニューヨルクヘラルド新聞の所有者なるゼームス・ゴルドン・ベンネット氏が其通信員の一人なるヘンリー・エム・スタンレーに電報を送つた。其時ベンネットはパリに、スタンレーはジブラルタルに居つた。スタンレーは此電報を受くるや直に出發、夜半パリに着して

此大新聞所有者の戸を叩き用向を尋ねたが、『リヴィングストンを見出して呉れ給へ』といふ短いむき出しの答を得た。『幾ら金を貰つてよろしうございますか』とスタンレーが問ふた。『五萬弗、足らなければもつと、金の事は心配しなさるな。リヴィングストンを見出してくれ給へ』と。

スタンレーは往つた。併し準備の爲に二ヶ年を費した。特別なる大計畫と周到なる準備とを要したのである。愈計畫は實行され、彼の大膽なる宣教的指導者が正に發見されたと云ふ時に世界は震駭せざるを得なかつた。

吾等の主は、其教會に音信を送られた。それは書物に記入され、更に無線電信によりて絶えず反覆されて居る。彼が言はるゝには、『我世界を見出して、それを伴れ來れ。金の事や人の生命の事などを心配するな。たゞ我が世界を見出してそれを導きかへせ』と。教會は確かに之をなす丈の導く力を有つて居るか。

吾等銘々

吾等の牽引力
生涯と云ふ土地に我身を播くこと
自分の爲に世界を導く必要あり
狹き小徑に廣き生活を營むこと
我身を神の御用の儘に供すること
奉仕の爲に益々發達すべきこと
我傳道地
吾等の靈觸

吾等銘々

吾等の牽引力

人にして、其全身全靈が耶蘇の精神に動かさるゝか、其人程人を導く力を有するものはない。人こそ地上に於て神の造り給へるものゝうちで、最も心目を惹くもの、又最大の牽引力を有するものである。

人は神の心を引く。神の創造力より此美麗壯觀なる世界を引出し、又耶蘇を神の御位より此地上に、貧賤と勞苦とに、人間の生活の制限の内に、誤解と苦痛と死とに引き下したるものは人である。神が之等の事を喜んで許し給ふたのは皆人の爲になるからであつた。耶蘇の御在世中、群衆が如何ばかり耶蘇を引いたか知れぬ。耶蘇は彼等の爲に粉骨をも惜み給はなかつた、されば彼の側に侍する弟子等は其譯をも

知らず彼の健康を氣づかふて諫言を呈した程であつた。

耶蘇は一人の人間の爲に自らの休養をなげうち、人の爲に深刻なる愛と最良な力とを惜み給はなかつたが、之は何を示すかと云ふに畢竟人の牽引力の強いことを示すのである。ニコデモの熱心は耶蘇の忙はしき生活より全く一夜を奪ひ、又彼より前古未曾有の妙味ある言葉を引き出した。スカルの小さい混血婦人は、捨てられたものではあつたが、尙耶蘇より將來彼女の生活と其村とを改善した所の力を引いたのである。

人は其同胞の心を引く。人程人を引付ける力を有するものはない。現今の都市が非常なる勢を以て膨脹するは其證據の一である。人が其同類を引付ける性質を有することは到る所に認められて居る。それ友情の存する、指導を求むる、家族の存する、又は何等かの目的を以て

人々が會合することなどは皆是人が其同類を導く力を有することを示して居るのである。此力は外界の事情の異なるによりて其形を變へ其程度を異にして居る。大指導者と大辯舌家とは特に此力を持つて居る。人各々多少之を有て居る。人は一個の磁性を有する北極である。人各々その精神的電流に由り人を己に引付るのである。

人は人を導く事が出來る。此事實は人が導く力を持つて居るといふことをよく現はして居る。全體此の世の中で導くに最も六ケ敷もの人である。種々な荷物の中で最も動かし難いものは人である。人は自分から動かなければ動くものではない。彼の意志に內の方から糸を結び付けて始めて彼を動かすことが出來る。情が意志の戸を開ける助けとなることがある。大抵の場合には此所から入るのである。時としては知力、即ち理性が其道を開くこともある、併し之は稀で

ある、又之等の兩者、即ち知と情とが一所になることもある。さりながら其場合に於ても、屹度一列になつて情が先きに立つのである、そして人の心の戸を開き、その人の意志に繩をつけて、彼が欲する所に彼を引出すことの出來るのは人ばかりである。之が出來るのは人であつて、人ばかりである。人は他人の牽引力に引れるのである。

深き崇敬の念を以て、斯くいふことが出來やう、神が世界を救はんと欲し給ふた時彼は人を送り給ふたと。實に、神は人として來り給ふた。耶蘇は人以上の方であつたが、然も彼は眞實又どこ〳〵までも人であつたといはなければならぬ。彼は其爲人に於て、又其生活に於て、全く人間のみであつたと思はるゝ程眞實に人として來り給ふた。人に他人を導く力があるが故に、耶蘇は人々を導かんが爲に、人として人間の仲間入りをなし給ふたのである。

生涯を云ふ土地に我身を播く事

どんな人でも其儘導くによいものである。彼は罪に縛られ又汚れて居るかも知れない。彼は深い僻見と、迷信と、境遇や教育の制限とによりて、其導き易い性質が失せて居るかもしれぬが、尙彼は、人に對して、力ある磁性を備へて居る。されば人は神が計畫し給へる本來のものに立ち歸へるに及んで、人を導く力を充分に發揮するに至るのである。罪が取り去られ、洗ひ流され、燒き盡され、罪に對する慾念は根絶され、其身體と心との諸能力に及ぼしたる罪の害毒が取除かるゝに及んで、始めて彼が生來有する、人を導く力が充分に顯はれるのである。耶蘇は人たるものゝ此任務を全うせんが爲に神が計畫し給へる人と云つて可い。耶蘇が人の生命内に入り、其心底に於ける罪といふ災を處理し、内部より之を支配し給ふに及んで、始めて人は人を導く力を恢復する

のである。

自分が既に導かれたる者であつて始めて他人を導くことの出來るのは勿論のこと。耶蘇の力を感じた人であつて始めて他の人に其非凡なる力を語る事が出來るのである。その他の人はそんな事を望みもしなければ、又出來もしない。なぜかといふと、その他の人は其力を知つて居らないからである。けれども其力を感じた人はどうしても話さゝるを得ない。何か知らんが心の内に話さゝるを得ざらしむるものがある。自分が救はれたといふことを痛切に感じて居る人は他人も亦救はれんことを切望して居る。耶蘇に對する心情はやがて他の人々に耶蘇のことを語らんとする心情となるのである。

ゼェリー・マコーレーは己の爲に其生命を與へ給へる人（耶蘇）に捕へられたが故にウォーター街に於ける救濟事業に其生命を與へなければならなかつたのである。天晴な青年ヒュー・ピーヴァーは耶蘇が其生命の磁石となり給ふたが故にペンシルヴァニヤ州の學生等を耶蘇に導かざるを得なかつたのである。リヴィングストンが亞弗利加の内地に、ダッフが印度の炎熱に、又ハドソン・テーラーが支那の内地に進入せざるを得なかつたのは、いづれも耶蘇の心情が彼等を捕へたからであつた。

偖て深く心に銘すべきことは此事である、神が彼の世界を引きもどさんが爲に頼みとし給ふものは人々であるといふこと。神は諸君に依頼し、又予に依頼し給ふのである。人々を實際に導く力は神の力である。神のみ能く人々の意志と心情とを動かして彼等を誘ひ、喜んで彼に來らしめ給ふのである。然るに神が之をなし給ふに當りては、人のうちにある導く力を用ゐて、始めて神の導く力を充分に働かしめ給

ふのである。

予は今之はどう云ふわけであるかを論じまい、勿論之は種々有益な る暗示に富んだことではあるが、今は唯此聖書全體に亘り、教會歴史を一貫し、又實驗上之が人を導き給ふ神の方法であるといふことに諸君の注意を喚起すれば足るのである。神は人の心を通路として他の人の心に到達し給ふのである。

人が神を失敗に歸せしむる時、神の御計畫は失敗に終るのである。神の主權といふは神の御計畫が失敗しないといふことではない。此所でいふ主權とは神が當初の御計畫を成就するに足る人を發見し給ふまで、一度失敗し給へる御計畫に、無限の忍耐を以て、執着し給ふといふことを云ふのである。

馬太傳十三章に於ける稗子の譬を説明し給ふに當り、耶蘇は最も著

しき言葉を用ゐ給ふた。彼はいはれた『美種は天國の諸子』なりと。吾等は眞理、即ち福音は吾等が播く所の美種であると考へて居るが、ここに更によい種がある、それは人々即ち救はれたる人々である。吾等は救はれたる我身、即ち吾等の生涯を人々の生涯といふ土地に播くのである。吾等が人々の間にあるは生命の種を播く神の最大の種播きをなさんが爲である。神は此種の上に聖靈の露と雨と光とを送り給ふのである。神は此種播きによりて最大の收穫を納めたまふのである。

自分の爲に世界を導く必要あり。

偖て予は暫く方面を變へて斯う云ひたい吾等は自分の爲に世界を導く必要ありと。世界は導かなければならぬ。之に就いては疑ふ餘地はない。それと同樣に吾等人間に取り導く可き世界が必要なので

ある。此世界が有るから吾等は鼓舞と刺戟とを感ずるのである。主が萬國に福音を宣傳すべきことを命じ給ふたことは、吾等の生活の必要と云ふ點から見ても極適當なことである。

何人でも其生涯を指導すべき大目的を持たなければならぬ、人は之を錨として、此世の波濤の間に安定を保つことが出來るのである。之に反して其人が何等生涯の大目的を有たなかつたならば、波濤の襲ふ所となり終には海底の藻屑となつてしまうであらう。げに幾多の人人は漂ふて居る、多數の人々は恐ろしき深淵に沈んで居るのである。

耶蘇の御命令は吾等に大なる目的を提供し、此目的を成就せんが爲に、各自らを强健にし、與へられたる一切の能力を充分に發揮せしむべきことを暗示されて居る。吾等もし之が爲に與へられたる此大目的に動かさるゝことがなかつたならば、吾等はつまらない小目的の爲に

齷齪たるに過ぎまい。

勿論予は目を醒して居る吾等のことをいふのであるが、多くの人々は常習的睡眠旅行者であつて、其歩くも動くも皆眠りの狀態に於てやつて居るのである。或る人々はどうしても目を醒さず必然に驅られの行動をなして居るのみで、内なる眞の人は眠つて居つて時々半ば目を開くのみである。

然るに目を醒して居る人々、何事かをなして居る人々はどうかと云ふに其勢力を消費せんが爲に劣等なる方面のことを求めてゐる。神より與へられたる勢力は勃々として活動せんと身構して居るが、人々は其本來の眞目的を棄てゝ劣等なる目的を取るのである。されば彼等は大なる仕事を目論むか、又それ程ではなくとも何か實業上、知識上、

政治上、社會上のことの爲に其勢力を費すのである。之はつまり人に何か大なる目的を握らんとする性質が備はつて居るから、其處から自然發して來るのではあるが、所謂パンを求むるに、冷淡にも、之に堅き石を與ふるが如きものである。

以上の事柄は、事柄そのものから云はゞ、勿論正しいことであつて、人生の企圖の内に屬することであるから、人の生涯の要所を之に占領せしむべきである。さりながら其要所はいつも明かに第二位の場所でなければならぬ。

基督信者なる實業家はその商賣の爲に歲月の大部分を費し、其思想と精力との最良のものを之が爲に費すのである。さりながら若し其方針宜しきを得ば其人はその商賣を第一に置いて居るのではない、更に高尚なる目的を達せんが爲に商賣をして居るのである。即ち耶蘇

の御生涯の大目的、又自分の終生の大目的、即ち人々を導き全世界を導くといふ目的の爲め其資金を供給しやうとして金を儲るのである。若し此大なる目的の鹽が味をつけて居ることであつたら其人の商賣も、社交も、友情もいかに美はしくなるだらうか。

狹き小徑に廣き生活を營む事

我等は此大目的を益々大にしなければならぬ。多數の人々の生涯は目的が小さい爲に萎縮して居る。吾等は近眼で困まつて居るが、主が吾等の爲に備へ給へる目的の眼鏡を用ゆれば、吾等の視界は驚くばかり大きくなり、其光景は益々廣く、益遠く、益明かになり、其行動も亦新たになるのである。然るに吾等が有する觀念の狹小なるは實に笑ふべく、又悼むべきである。

予は或る日エンデアナ州に於てフォルト・ウェーンの汽車に乗つたことを記憶する。時に車中で知り合ひになつた二人の男が話をして居るのをもれ聞きした。一人はエルクハートに住んで居つた。他の一方の人は其人にエルクハートは何處にあるかと尋ねた。所がエルクハートの人の側に坐つて居つた可愛らしい童子が、其問を聞くや否や目を圓くしていふた。『エルクハートがどこにあるか知らないの、なあに、エルクハートは我家の處です。』

此無邪氣な子供は或人々に關して實際を語つて居る。或人々が有する神の世界と云ふ考は此子供の範圍を越えぬ。世界とは彼等が生活する處であつて其他の場所は甚だ漠然たるもの、あつてもなきが如きものである。若しあるとしても其人々の思想の上にのみあるのである。

『己が爲に生く、己が爲のみ、
己が爲にして何等他の爲にあらず、
耶蘇が生き給ひし事なきが如く、死に給ひし事なきが如く。』

此種の人々のやうに狹隘にしてさながら井中の蛙の樣な生活をして居つたならば實に憐むべき悲むべきことではなからうか。のみならず實に悲慘なることである、なぜか、といふに多數の同胞兄弟等は此國にも亦外國にも吾等を通じて與へらるべき援助を切りに要求して居るからである。

多數の人々は至つて狹い生活を送つて居る。彼等が日常の地平線は家庭とか、店とか、工場とか、事務所とかいふ範圍を脱しないで、毎日毎日、年々歳々同じ事ばかり繰返して居るに過ぎぬ。其爲す所が狹いものであるから人々をも狹くするのである。日々の行動の範圍に從つ

て彼等の思想は其影響を蒙るのである。彼等の仕事は日々同一轍を踏むのみであるから其思想は沈滯し、其精神は縮まつてしまふのである。全世界に於ける最大多數の生活は概ね斯の如きである。

何か大きなものを見るは精神上非常な氣やすめである。大なものはいつも人の氣を引く力を持つて居る。是恐らくは吾等の日常生活が至つて狹く至つて小いからにもよるであらう。一方に於て耶蘇は吾等の精神を常に新たにし爽かになさんが爲め大なる計畫を立て給ふのであるが、他の一方に於て、吾等の足は尙同一の古い狹き道を辿つて居るにも拘らず、吾等は世界を入るゝ丈の大な心と、天地を經營する丈の頭腦とを有して居る。

一人の青年が大な製造場の片隅に、恰も水車の廻轉のやうな變化のない、極平凡無趣味な仕事に從事して居る間にも、尙其工場の持主より

も更に大なる事業に從事して居ることが出來やう。即ち彼は世界の爲に計畫をなし、之が爲に祈り、又實際己が强大なる目的の腕を以て之を神の高きに掲げて居るかもしれぬ。

物品發送掛は終日箱の蓋を叩いて居るかもしれない、併し一叩き毎に彼が心中の祈りを支那の爲め、印度の爲め、又自分が擔當する日曜學校の組の爲に捧ぐることが出來やう。

『午前と、午後と、夜と
午前と、午後と、夜と
午前と、午後と、それから何？　それ丈か？
空謠を繰返すも益なからん。然り、要は生命なり。
此午前を崇高ならしめ、此午後を讃美たらしめ、此夜を祈禱たらしめよ、さらば時間は汝が征服する所、寶冠は汝が獲る所とならん』。

吾等が大きな事を爲して心氣一轉を計るは主が其惠深き御計畫の中に置かれたことであつた。吾等は大なことをする爲に造られたものであつて、大なことは吾等をして大ならしむるのである。世界を導くと云ふことは狹き徑を歩み齷齪として日常生活に追はれて居る多數の人々に與へらるゝ大なる賜物である。

我身を神の御用の儘に供すること

苟も熱心なる人が自己に問ふべき大問題は、如何にして我は神と我が同胞とに對して最も有用なるものとなることが出來るかといふ事である。予は此問題に答ふるに當り、予が助けとなつた三つの事を述べやうと思ふ。さすれば幾分か諸君の御參考になるかもしれない。

第一の事は是である。吾等が神の御用の儘になるといふこと。我

は如何なるものであつても、又我に與へられたる賜物と機會とが何であつても―皆之を神に提供し、其御用の儘に全く委ぬることである。神は吾等銘々に獻身したる人格を求め給ふ。『獻身したる』とは神の御用に己を供することゝ、神に捧げたるものを神が用ゐ給ふといふことであつて聖書に使はれて居る此言葉の意味は此二つである。

我人格云換ふれば我内にある自我は自分が生命の内に持つて居る最も大切なものである。人々が自ら我として認むるところの此人格に倚りて神の靈は其働きを他の人々に及ぼし給ふのである。我人格は我存立一切より成立するものである。我現前は我存立の凡てを總括したる微妙なものであつて、我到る所に常に伴ふものである。人々は我が名によりてそれを知り、それを通じて内なる人の力が他に及ぶのである。

身體、目の光、音聲の質、並びに調子、起居振舞、其外樣々のものが一つに結合し、之等のものが人格の外殼たる彼が現前を成立するのである。之に倚りて內にある凡ての力は外に現はるゝのである。されば人の現前は計るべからざる感化力を有するものである。人々銘々より流れ出る微妙にして、觸ることの出來ない靈動力がある。此力は全然內なる人の力量に比例するものである。或人に於ては之が甚だしく人氣を引くものとなり、又時としては全く反抗的のものとなる。つまりそれは內なる人の發露である。其人の現前は大なるも小なるも、貴も賤しきも精なるも疎なるも、皆其人が有する內なる精神の致す所である。人の意志の强き或は弱き、彼の心の清き或は不潔なる、彼の生活の或は高き或は低き、彼の思考力の或は鋭き或は鈍き―之等凡ての物は彼等の現前に現はるゝのである。

吾等は强き現前の人と弱き現前の人との區別を知つて居る。吾等は銘々の現前を通じて、吾等に接觸する人々に絕えず感化を及ぼして居る。さて之が人を導く爲に大切なものである。耶蘇は之を用ゐ給ふた。神の靈が他の人々を動かさんとし給ふに當り用ゐ給ふものは之である。吾等は吾等が持つ所のものを以て最も能く人を導くのである。

勿論予は吾等が何時でも斯う云ふ風に考へて居らなければならぬといふ譯ではない。そういふことを考へて居らば、それが却て人を導く妨げとなる。吾等がそれに就いて全く無意識な時に最も有力であつて、又妙味を有するのである。吾等が耶蘇の爲に、又吾等の同胞の爲に全く己を忘れて居る時に吾等の內に本來存する所の導く力が最もよく發揮さるゝのである。此力は罪によりて大部分覆はれ又隱され

て居る。されば或人々には此力が缺乏して居様に見える。又或人々は神を無視するにも拘はらず大に之を有して居る。

さりながら神が吾等を指導し給ふに當り、又吾等が吾等の行爲と諸能力とを神の靈導の儘に供するに從つて、本來の神の姿が現出するのである。これ神が與へ給ふた本來の狀態にかへつたのである、即ち罪によりて失はれたるものが恢復せられ、神の靈の力によりてそれが更に偉大に、更に豐富になるのである。斯くて我は與へられたる此貴き人格といふ賜を神の充分なる御用に供することが出來るのである。

奉仕の爲に益々發達すべき事

次ぎに大切なるは、此獻身したる人格を發達したる人格となすことが出來るといふこと。吾等は初めから成熟するものではない、だんだ

んに成長するものである。生活の最大にして又最も美はしき事業の一つは、其質に於ては細やかになり、其姿に於ては大きくなり、又其行動に於ては熟達せるものとなることである。人生の最高の成業は自らの主となること、即ち自我の諸能力が大なるもの、密なるものとなり、且つ之を最も巧みに且つ其本性に從つて使用するものとなることである。他の凡ての成業は皆此事に從屬するものである。

我身體が强健なるに從つて神の御使用に供することも從つて多くなる。我身體に關する靈妙にして大切なる法則を充分に了解するに從つて之に服從する習慣は益强くなり、是に由り神は其經綸を成就せんが爲に益々我を用ゐ給ふことが出來るのである。食ふこと、飲むこと、呼吸すること、運動すること、眠ること、休むこと、着物を、着ることなどの如き極普通のことも、若し吾等が心を盡して全く神の爲め同胞の爲

めに之を爲すことが出來るならば、もう普通のことゝ呼ぶことが出來ぬ。

修養によりて思考力を更に英敏に、更に明晰に、更に强大ならしむるに從つて、吾等が他人に及ぼす所の勢力も亦一層加はるのである。吾等の心情が淸潔なるに從ひ又個人的習慣を支配する所の實際的の理想が高尙なるに從ひ、人を導く吾等の力も亦更に大なるものとなるのである。

吾等は其差違を意識しないかも知らぬ、又其事を考へても居るまい、併し他の人々は吾等の牽引力の增加と、人格的勢力の發射とを明に感知する。從つて他人の上に與ふる所の感化は其人々が認むる所のものよりも大なるものである。吾等は奉仕の爲に益々大なるもの、益々善なるものとならんことを努めなければならぬ。

我が傳道地

第三の事は廣き世界的幻像である。云換ふれば吾等の考ふる所、計畫する所、祈る所、與ふる所は世界的でなければならぬ。之は何も不思議なことではない。不思議な事は此事があまり少いといふ點である。人は世界大に造られたものである、されば吾等の思想と行爲とによりて世界を一丸とするは當然の事である。然るに至つて小さい考を抱いて生活するは罪の癡擊の結果である。吾等は大きく造られた。されば吾等は大きい。吾等は大なる世界を要求する。吾等は大きな事を喜ぶのである。吾等は此世界的計畫の上に生活するに當りて吾等の本性に最も眞なるものとなるのである。本來世界は、之を征服し之を導かんが爲に、吾等に與へられたのである。

とは云ふものゝ決して近い所に在る事物や人などを疎かにすると

いふ意味ではない、若しそんな風に考へる人があるならば、それは罪の痙攣を受けて居るからである。朝夕祈禱の時に聖書を開き、其傍に世界の地圖を擴げる人は自分の側にある同胞に温かなる手を伸べる人である。吾等はそういふ風に造られて居るから、一方に於ては地球を握り、他方に於ては手近い所に助を求めて居るものを握るのである。之は吾等の内に存する神の姿の一部分である。神の御支配に己を御任せすれば本來の力が吾等にかへり來るのである。

その一つの結果として、吾等のうちの幾多の者は、自ら進んで廣き世界の傳道地の遠い所に赴くといふことになる。之は中々重大なことであつて、身體も丈夫でなければならず、又相當な訓練をも受けて居らなければならない。此事業たるや、實に大なるものであつて種々苦しき困難に遭遇しなければならない。秀英の人々が之が爲に召されて

居る。

自分で外國傳道に赴く事が出來るならば之に優つたことはない。願くは諸君が萬難を排して之に就かれんことである。何處にても奉仕は特權である。さりながら奉仕の最高の特權は彼所にある。多數の人々が往くことは出來ぬ。ある人々は確かに内地に留まることを命ぜられて居る。内國にありて宣教事業の管理に從事する有力な人人も亦必要である。

第二の結果は、吾等の住居する處が吾等に取りて傳道地であるといふことである。吾等が在るは受けんが爲にあらずして、**與へんが爲に**在るのである。遠き支那に居るとも又は平凡極まる内國の町村に居るとも、吾等は始終直接**の接**觸によりて、人々を耶蘇に導いて居るのである。大切なることは神の靈をして、吾等の内にある何ものにも妨げ

られず、吾等に倚りて自由に又充分に働きをなさしめ、かくて吾等が接觸する所の人々に觸れしむることである。

實業の範圍に於けると、社交のそれに於けると拘らず、吾等は心の内に『我は仕へるものゝ如く卿等の内に在るのである』といふべきである。有意的には直接の言葉により、間接の接觸により、愛の外交政策によりて人を導き、無意識には吾等の人格の力によりて人を導くべきである。

直接に人に接觸することの如何に力あるものなるかはどんな想像をめぐらし、どんな言葉を用ゐても充分に之を示すことは出來ない。之は魔術の如く人を震動せしむるものである。多少間接な場合に於ても、其力は實に明狀すべからざる程大なるものである。マサチュセッツ州に於ける米國土人の間になせるジョン・エリオットの働はデ

ーヴッド・ブレナードを燃し。ブレナードの火はジョナサン・エドウァードに觸れ、エドウァードの『**信仰復興に對する異常の祈を地上に於ける基督の王國の發展**』と題する小冊子はウィリヤム・ケレーに傳道會社の計畫を與へた。火は擴がつた。神の御手が觸れた所に、神の火は、人の手に觸れた處を傳ふて進むのである。

吾等の靈觸

第三の結果は之である。吾等は吾等の靈觸によりて、世界に手を伸し人々を導くのである。諸君が亞弗利加の蠻地に於けると、支那の古代文明の中心に於けると、内國に於けると拘らず、地球の極にまで感ぜらるゝ樣な非常な靈力を働かすことが出來るのである。

それは耶蘇の名に於てゝある。聖靈の力によるのである。其名に

より、其靈に倚つてのみ、斯くの如き感化力を凡ての人に働かす事が出來るのである。斯くて人は其側にある人と靈觸を保つ事が出來るのである。又之と同じ道理によりて地球の最も遠き所に居る人々と靈觸を保つことが出來るのである。

直接なる人格的接觸によりて及ぼす所のものゝ外に、吾等各々より發出する所の靈の感化力がある。それは有意的の感化ではない。即ち吾等はそれが感化を及ぼして居るといふことを意識して居らない。吾等が祈る時にそれは吾等より發出する。それらの遠い所の事物や人々に向つて吾等の思想を集中するに當つて、それが吾等より發出する。其力は其人の人格の力に因るのである。

大なる人格が、直接に接觸する人々の上に及ぼす感化力は、小なる人格のそれよりも強大なるものなることは吾等の熟知する所である。

此事は靈觸、即ち靈的の接觸に關しても同樣である。吾等が益々強く、益々鋭敏に、益々清潔なるに從ひ、耶蘇の自制より學ぶ所の自制を積むに從ひ、吾等は直接なる接觸により、又靈觸により、人々を導くものとして益々偉大なる力を働かすことが出來るのである。

今や此話を終るに當り、願くは諸君が靈に於て更に近く席を進められ、予をして靜かに次の事を尋ねしめよ。吾等は主の御用のまゝに自らを捧て居るだらうか。又吾等は日々に成長して更に大なるもの、質の積みたるもの、更に自制力を有する男となり又女となつて居るだらうか。主は吾等を力と賴み給ふ。彼は吾等を用ゐることを大に賴みとして居らるゝ。彼は吾等銘々に倚り地球の隅々にまでも達し給ふことが出來るのである。希くは吾等は耶蘇に御失望を與へたくないものである。

耶

蘇

耶蘇は人を惹き給ふ

耶蘇は最良のものを引出し給ふ

戸は多けれども、目的は一なり

物語とせよ

ペテロはパウロにどう話したか

更に優りたる途

耶　蘇

耶蘇は人を惹き給ふ。

神こそ大磁氣である。彼程よく人を導きて惹き付けるものはない。人もよく惹き付ける力を持つて居るが、之は神が斯く造り給ひしが故、爾來彼を引立てゝ日々に斯く改造し給ふが故である。神は御自分の一部分を人に與へ給ふ。茲に吾等人間がよく人を導き得る秘訣が存するのである。

偖て耶蘇は吾等に取りて神に在します。吾等は耶蘇を知りて初めて神を知るのである。耶蘇は、人間の心に拍子と調子とを合せて鼓動する、神の心である。人の心を惹く耶蘇の如きものはない。人の本來の導く力と神の神々しい導く力とが耶蘇に於て結合して居る。耶蘇

はいつも人々を己に惹き給ふた。今も尙さうであるが、いつまでもそうであらう。

耶蘇は地上に御出になつた時にあらゆる種類の人を惹き給ふた。敬虔に富めるバビロンの星學者は、拒むことの出來ない强力に惹付られて、遙々耶蘇聖誕の地に詣うでた。彼はイスラエル民族中最高の社會に屬するニコデモの如き思慮ある學者等をも惹き給ふた。彼は又羅馬帝國に仕へたる大官、富める陸軍將官等をも惹き給ふた。同じ力によりて彼は混血人種として賤められたるサマリヤ人や、又修養あるギリシヤ人の間より眞理を求むる人々をも惹き給ふた。

ガリラヤの平凡なる農夫も强健なる漁夫も手皮の厚い勞働者も熱心に彼の下に聚つた。彼は又非凡な靈的洞察力を有するベタニヤの潔くして立派な生立の、優しいマリヤを惹き給ふた。又名もしれぬ、罪

にそみたる、捨てられた女をも惹き給ふて、其罪を赦し之を愛し且つ之に多を與へ給ふた。

マタイの如き商賣上の掛引に抜目のない慾の强き人々も、ナタナエルの如く清き心と高き理想とを有する人々も一樣に耶蘇の引力を感じた。特別なる努力と特別なる目的とを以て耶蘇は、門閥に生れ、傲慢にして、學者肌を有し、而も性急なるパウロを惹付け其狂氣じみた敵愾心を打捨て終生の奉仕をなすに至らしめ給ふたのである。

群衆來集の爲め、耶蘇が日課として神と人との爲に盡し給へる仕事は再三再四、甚しく妨げらるゝ程であつた。又有力なる人々も單獨に彼の下に至りて心中の饑渴と疑問とを披瀝した。彼を審議たる羅馬の裁判官は其所信に從ひ公然耶蘇に歸依する勇氣を缺いて居つたが、耶蘇の容姿と言葉との不思議な牽引力を感じた。又彼が死刑執行を

司どりたる羅馬の役人は彼の人格の力に敬意を表さゝるを得なかつたのである。

世界は皆彼の十字架の周圍に雲集した。あらゆる地方よりの代表者等は群をなしてエルサレムの祭に詣で、其朝誰いふともなく彼が懸けられ給ひし場所に惹き付けられた。

彼は誘惑者の首領をも惹き給ふた。サタンは巧みたる誘惑と、苦々しき惡意と、極惡なる狡猾とを有つて來た。之と對照して揭ぐべき彼が清潔なることゝ、善良なることゝ、又其使命に忠實なることゝの更に大なる證據はあるだらうか。

耶蘇は最良のものを引出し給ふ。

耶蘇は又人々の内にある最良のものを引出す力を持ち給ふた。一

度耶蘇が觸れ給ふや、其人々のうちに在る可能性、特色、能力など、當人等は勿論のこと、其友人等も其人々が持つて居つたと思はなかつたものが、立派に發揮されたのである。耶蘇の内に何か力があつて、それと同種の力を人々から引出し給ふ樣に見える。

熱烈にして激し易い漁夫シモンより强健岩の如き人物を引出し、雷の子、火の如きヨハネより温良にして强烈なる愛を有する人物を引出し、靜かにして控目なアンデレより人を耶蘇に導く評判を作つた人物を引出し給ふた。

彼はスカルの捨てられた者より罪の自覺を引出し、之をして魂を導くものとならしめ給ふた。又陽な罪を犯した、もう一人の婦人より清潔の渴望を引出し給ふて凡て彼に來るものゝ好模範となし給ふた。

彼は力ある接觸により生來の盲人より主の爲に喜んで一切を捧げる

心を惹起せしめ、又雷の他の一人の子なるヤコブより、何人も思も寄らぬ性能、即ち人の爲に難難をも厭はぬ勇氣を引出し給ふた。

之は皆耶蘇が人として此世に來り給ひし時のことであつたが、遠く白雲の彼方に去り給ひしより今日に至る迄彼はやはり萬民を惹き給ふて居る。今彼が惹き給ひし人々を一々擧げんとせば、ヘブル書の著者が云へるが如く、とても時はたらぬ。高きも低きも、いかなる階級、かなる人種に屬する人も、野蠻なるも文明なるも、いかなる時代の人々も皆彼の力の震動を感じたのである。又彼等は最も貴重なものと考へて居つた凡てを捨てゝも彼に從ふたのである。

彼は今日も同じ事である。彼は人々がいかなる所に集るとも、都市の貧民窟に於けると蠻地に於けるとに拘はらず、大學の教室に於けると商賣の巷に於けるとに拘はらず、教養ある哲學者の間に於けると無

學文盲の間に於けるとに拘らず彼は今日も其牽引力を充分に發揮して居らるゝのである。彼はいかに强烈なる墮落の力に反抗しても引き給ふのである。彼は若し上げられたならば凡ての人を引かんと約束し給ふたが、未だ曾て之を破り給ふたことはないのである。

偖て、人々が要求し欲求して居るのは實に此惹き給ふ耶蘇である。耶蘇を人々に提供する大なる利益は何處にあるかといふに、人々の心の內に耶蘇に應呼するものが存して居るからである。其幾部分は塞がつたり、覆はれたり、押出されたり、爭鬪したりして居るかもしれぬが、確かにそこに存して居るのである。されば諸君が耶蘇を人に提供するならば、さながら其人の需用に應ずるに供給を以てするを發見することが出來る。即ち諸君は其人の心の疑問に答案を提供する譯である。是恰も何等かの妨げによりて分離されてゐた二つのものを、又元

の通り一つに結合することに該當するのである。

其妨げは頑固であるから大に戰はなければならないが、最後の勝利は必ず此方のものである。之が取りも直さず吾等の爲すべき重なる任務である。さすれば人の内にありて耶蘇の聖旨に適ふものと、耶蘇の内にあるものとが全く相適合、合致する。如此相合して一つとなる所には必ず幸福がある、此に於て到る所、あらゆる種類、あらゆる階級、進歩のあらゆる程度の人々が皆熱心に彼に應呼するに至るのである。かくて其人々は、耶蘇に於て、彼等が有する最も深刻なる渇望に對する充分なる應答を發見したと公言するに至るのである。

戸は多けれども目的は一つなり

吾等が人々に提供する所のものは實に此不思議な磁石たる耶蘇であつて。神學でも、教育でも、醫術でも、病院でも、勞働の補助機關でもない、之等のものは何れも皆屬發的のものである。つまり之等のものは泉から水を汲んが爲に渇したる旅人に喜んで貸與ふる水呑の如きものであつて目的を達する手段に過ぎない。

されば吾等は予は神學を批評したり非難したりする考でない事は諸君が諒察せらるゝであらう。神學は之を用ふべき場所がある。さりながら衆人の群る所は之を用ふべき場所ではなくして、むしろ之は教室の靜かなる所に適しいのである。眞理を周到に研究し之を組織に並べるといふことはなければならぬこと、根氣よく研究し頭腦を訓練するといふことも必要である。

基督教の學者等が建設したる立派なる土臺が無量の價値を有するものなる事は云ふまでもない。さりながら之は概して學問上の事柄

であつて、吾等をして更に良き働手たらしむるもの、人をして其方角と釣合とを得せしむるものである。けれども群衆の輻輳する巷に於ては神學は用がない。彼等が求むる所は耶蘇である。何處に於ても人人は耶蘇の事を聽んとして居るは著しい事實である。

教育事業は傳道上離るべからざる大部分を占めて居る。さりながら其目的は人々の生涯に耶蘇を入れやうとして戸を開く爲である。勿論外の目的がなくとも、教育そのものだけでも價値はある。さりながら、如何なるミッション學校に教へて居る教師であつても單に教育といふことにのみ沒頭して、之を更に高尚なる目的を達する手段と考へない人は其事業全體の目的を失つて居る人である。

又外國傳道地に於て醫療事業に從事する人々は實に貴き仕事を執つて居る。病院や、又は私宅に於て熟練と、忍耐と、忠實とを以て此任務

に當つて居る男女は計るべからざる價値の事業を爲してゐる。肉體の治療の爲めばかりでも之は大に爲すべきことではあるが、而も其裏面に於ける目的は人々を導きて耶蘇を知らしむるといふことでなければならぬ。人の身體を助けるといふ人ほど人の心に達する近道を有するものはない。

之等の事は人々の生活に達する玄關であつて、實に大なる玄關である。此働の範圍が身體と、頭腦と、改良されたる生活狀態といふこと以外に及ばないとしても、之が爲に費されたる金錢と生涯とを償ひ得て餘りがある。さりながら其主な目的は人の心に達するの道を發見し、耶蘇を提供するといふことであつて、肉體上の幸福と共に精神上の幸福をも與へんが爲である。

物語とせよ

偖て、耶蘇を人々に語るに一番良い方法は何であらう。時に、當今の新聞記者が其業務に當つて用ゐる規則は『物語とせよ』と云ふことである。之は筆を執るに當り彼等の金科玉條とする所である。どんな場合であつても、學者の集會であらうと、市井の會見であらうと、物語體に書くのである。之が努むべき理想である。叙述とか、引例とか、說明とか、哲學的議論とか云ふものも、皆此網のうちに織込むのである。これと云ふも、物語は最も讀み易く、注意を惹き易く、而も之を語るに最も困難なことを此人々は知つて居るからである。

吾等も亦耶蘇に關する物語とせよを規則としなければならぬ。福音を人々の集に話すには、其集の大なると小なるとに拘はらず、ニューヨークに於けると上海に於るとに拘はらず、之を物語とするのである。

又どこから話を始むるとしても、其目的は耶蘇に導くといふことでなければならぬ。其話を惹き出す迄に二十五分間を費すとしても、最後の五分間は耶蘇の事を語らなければならぬ。斯くて最後の五分間が三十分全體に味を付けるものとなるのである。又は耶蘇のことから話を始め全體に渡りて之を以て貫ぬいてもよい。さりながら規則として守るべきことは、人々が面白く感じて耳を峙てる樣に解り易く、自然に人の氣を惹く樣に話すといふことである。

之をなすには、骨折つて充分に準備しなければならぬ。群衆に取り通俗的で解り易く又自然であると見ゆるものならば、それだけ準備に骨が折れるのである。準備した話であると人々が氣が付かないやうに充分周到に努めなければならぬ。諸君は聖書の物語を少しづゝ能く能く研究してそれが自分のものとなるまで努めなければならぬ。

又此聖書を更に明瞭になし、解り易くする爲に他の書籍をも用ゐなければならぬ。それが聖書に關する書籍の務めである。若し之等の書籍が聖書を解り易くするならば、それで其使命を果したものである。之に反して若し人を聖書に導かず、却て人をして之等の書籍に逗留せしむるやうでは其目的を失つたものである。

聖書の叙述は東洋的である。其物語は東洋民族の習慣の上に作られて居る。其話は單純な教訓に充ちてゐて容易く了解さるゝが、其意義の眞味を味うには之等の民族の習慣を了解しなければならぬ。故に苟も人々を導かんとするものは大に勵んで之を研究しなければならぬ。かゝる人は聖書の話を熟讀含味し、其話を聖書より引出さんが爲め努力しなければならぬ。

偖て、其場合に於て告んとする特殊の趣意は何であらうとも、眞直に

耶蘇に導くものでなければならぬ。此點に關しては聖書の規則に從ふが可い。實に舊約聖書は皆耶蘇に指を差して居る。故に舊約聖書を了解せんとせば先づ耶蘇を了解せねばならぬ。新約聖書も亦耶蘇に滿ち充ちて居る。されば耶蘇の物語を人々に話されよ。人々は決して之に倦むことはない。それを正確に話されよ。簡潔に話されよ。色々風を換へて話されよ。人々が物語の事のみを考へて、諸君のことや諸君の言葉などを考へないように通俗日常の言葉を以て述べられよ。

耶蘇の御生涯、彼の特徴、いかなる人々と交り給ふたか、又いかに語り給ふたかを話されよ。福音書に記載されたる事蹟を捕へ、今日の言葉を以て味をつけ色彩を施して述べられよ。ナザレに於ける御生活、或は家庭に於る、大工の工場に於ける、或は村に於ける有樣を話されよ。

あの驚くべき三年半の事柄を少しづゝ述べられよ。

誘惑の野に往き、ガリラヤの蒼海に出で、ゲッセマネの橄欖の森に入られよ。或はカルバリーと呼ばるゝ丘陵に登られよ。其物語のいづれの點を語るとしても言葉か、句か、漸層か、何かに依りて明かにカルバリーの色彩を有たしむることを忘れてはならぬ。

勿論諸君が話をなさる時に神學が入て來やう。說明をしたり批評をしたりすることもあらう。說敎者等はそれを神學と呼んで居る。それも止むを得ざることであらう。若しそれが物語から自然に發出することであるならば、如此敎訓も適當である。さりながら物語が主なるものでなければならぬ。人々が敎理の學說ではなく、人なる耶蘇に就いて考へながら歸るやうにしなければならぬ。

ペテロはパウロにどう話したか。

ムーデー氏がクリーヴランドに開かれたオハヨー州日曜學校大會に於て話した時の事を能く記憶して居る。氏は日曜學校の敎師等は聖書を開いて人の氣を惹く樣にそれを敎へなければならぬことを說き、一千八百八十四年にロンドンに於てエデンバローから來た辯護士の友達と話をしたといふ物語を話した。其人はアンドリー・ボナーが其都で說敎したのを聽いて非常にそれに感服して來たのであつた。

ムーデー氏は其話をこんな風に語つた。

『ボナーが加拉太書に記されてあるパウロがペテロを訪はんが爲にエルサレムに往つた事に就いて說敎をして居つた。そして彼はペテロがパウロに斯ういふたと想像されると述べた、「貴殿は散歩を御好みなさるか」と。それからパウロは好むと答へたので、兩人は手に手

を取つてエルサレムの町を通り、キドロンの河を渡り、やがてペテロは止まつていふた。「見給へパウロ殿、これなる地點は耶蘇が悶へ苦しみ給へる處血の汗を流し給へる處あれなるはヨハネとヤコブとが眠りたる場所、あれあの所が。又右なる此方は拙者が眠つた場所でありまする。拙者は若し眠りにつかなかつたならば主を否んだとは思ひませぬ、さりながら遂殘念ながら眠りました。拙者は眠りにつきまする前に、主が『父よ若しかなはゞ此杯を我より離ち給へ』と申された最後の御言葉を記憶して居りまする。拙者が目を醒しましたる時に足下が立つて居らるゝ丁度そこに天使が立ちて主に話して居るのを見ました、又拙者は血の大きな汗が主の兩頬を傳ふて落るのを見ました。其後間もなくユダが彼を賣さん爲にまゐりました。その時主がユダに親切に『爾は接吻を以て主を賣すか』といはれたのを聞きました。

そこで人々は主を縛りて御引立て申ました。其晩主が審かれ給へる時に拙者は彼を否み申したのでございました。」

『斯くペテロは畫くやうに全體の有樣を話した。翌日も亦パウロに云ふた、貴殿は「今日も亦散歩は如何でありまするか」とパウロは又承諾した。其日彼等はカルバリーに往つた。そして彼等が丘に登つた時にペテロはいふた、「これパウロ殿、此所が主が貴殿と拙者の爲に死に給へる場所でありまする。あれなる穴を見給へ、あれは十字架の立ちたる跡でありまする。信じたる盜人は彼方に懸けられ、信せざる盜人は此方に懸けられました。マグダラのマリヤと主の母のマリヤとは彼の所に立ち、拙者は群衆を離れて彼方に立つて居りました。

『拙者が主を否み申したる前夜の事でありましたが、主は溢るゝばかりの御愛を以て拙者を顧み給ひました。其時拙者の心は破るゝばか

りの思に襲はれ、どうしても近づいて主を見奉ることが出來なかつたのであります。今更思へば之ぞ拙者の生涯の最も暗黑なる時期でございました。拙者は神が御手を下し給ふて主を十字架より取り給はんことを願ひました。拙者は耳を峙て主の御聲を聽かうと努めました」。それから彼は兵卒等が耶蘇の御胸に槍を刺したこと、彼に荊棘の冕を冠らしめた事など一部始終其時の有樣を話した。

『其翌日も亦ペテロがパウロに散歩を勸めたがパウロは又之を快諾した。そこで彼等は又、エルサレムの町を過ぎ、キドロン河を渡り、橄欖山を越え、ベテバゲを登り、ベタニヤに近かき傾斜地に來た時、ペテロはふと立ち止まりていふた「これ、パウロ殿、之は拙者が最後に主に見えたる場所であります。其日程美はしく主が語り給へるを聞いたことはございませぬ。

『主が最後の御言葉を吾等に傳へられたるは丁度此所でございました。その時拙者は主の御足が地にふれて居らぬを認めました。主は立ち上り給ひましたが、俄かに雲が降り主を受けて見えずなり給ひました。拙者は此所に立ちて天を仰ぎ、もう一度彼に見え彼の御言葉を聞き奉らんと願ひました。其時に白き衣を着たる二人のものが吾等の側に降り來り其所に立ちて、「ガリラヤ人よ何故に天を仰いで立るや爾曹を離れて天に擧られし此イエスは爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く亦來らん」と申されました。』

そこでムーデー氏がいふた、『我が親愛なる諸君よ、私は諸君に御尋ねしたい。諸君は此描寫はやり過ぎて居ると信じなさるか。諸君はペテロがパウロを客として接待しゲッセマネに伴はなかつたと思ひなさるか、カルバリや橄欖山に案内しなかつたと思ひなさるか。私は

エルサレムに八日間を費しましたが、主が血の汗を流し給へる園に毎朝往つて見たいと思ひました。私は毎日橄欖山に登りて主が父の下に往かれたる青空を仰いで眺めました。

『私はペテロがパウロを携へて之等三回の散歩を試みた事を疑ひません。若し主が血の汗を流し給へるその場所に、私を案内するといふ人があつたならば、私は其人に案内を請はないと諸君は御考へなさるか。偖て教役者諸君、諸君はそういふ様な説教を人々が好まないと御信じになるか。人々は好んで居ります。彼等は主に就いて聞かんことを欲して居ります。』

予は其大會に出席して聽衆の顔がよく見える所に座つて居つた事を記憶する。其有様はどうしても忘るゝ事は出來ない。予は熱心に上を向いて聽いて居る群衆の顔も、ムーデー氏の話をも明に記憶して

居る。人々は水を打ちたるが如く、目を大くし、之に露を浮べ、時々情迫り、ハンケチを用ゐて居つた。

ムーデー氏は至つて自然に、靜かながらも、而も強く話した。之が人人の欲する所である。平易に又自然に耶蘇を提供するのである。ムーデーは能く之を知つて居つた。かういふ風に話さんが爲に彼は永い歳月の間苦心して練習を積んだのである。如此話さんとすれば大に勵み勉めなければならぬ、併し若し吾等が耶蘇を人々に知らしめ、人を惹き付ける其驚くべき力を示すことが出來るならばそれは決して徒勞ではない。

『更に優りたる途』

耶蘇の物語を人々に話すもう一つの方法がある。それは更に良い

方法、即ち諸君の生活を以て之を語ることである。之は耶蘇御自身の御計畫であつた。耶蘇は敎へ給ひし通りに生活し給ふた。耶蘇は吾等一人々々に降り、吾等の内に再び其生活を繰返し給ふのである。されば人々が吾等に逢ふは取りも直さず吾等の内に在ます彼に逢ふのである。彼の内にある特徴は吾等の内に認め得らるゝのである。

深く罪を憎む事、清潔、柔和、忍耐、温かなる同情、常に己を忘れ、己を犧牲に供すること、人々を導んが爲の熱心、人々を助けんが爲に到る所に往きて撓まざるの精神―之等のものは彼に於けるが如く吾等にもあり、我の内に彼を宿し奉るに當りては皆我物となるのである。斯くて人人は耶蘇の物語が實際生活の内に實現さるゝを認むるであらう。耶蘇は吾等に倚りて人に手を觸れ給ふのである。吾等が之を認むる以上に彼は之をなし給ふのである、確かに彼は之をなし給ふのである。

之が物語を話す最良の道である。

羅馬に於ける『公平殿』に珍しい一室があつて、見物人は時々之に案内さるゝといふことを聞いて居る。此室の珍らしいのは其裝飾である。天井も、壁も、床も、一面に異樣な繪畫を以て覆はれて居つて入つて見ると奇異な感じを與へる、即ちそれは如何にも奇怪千萬、調和が取れて居らぬ、各部釣合つて居らぬ、只混雜の塊、人の目を困惑せしむるのみである。さりながら其室に一つの地點があつて、其地點に立たば始めて全體の調和が取れ、設計者の考案の通り遠近よろしきを得、其色彩と美觀とが實に完全なるものとなつて浮き立つて見えるのである。

最多數の人々に取り、此古き世界に於ける生活は、丁度此羅馬の一室のやうに見え、事物が調和を缺いて居るやうに思はるゝ―罪、苦痛、混雜、

渇望の滿されざる、弱點の制御し得ざる、計畫の破れたる、野心の失望に歸したるなど支離滅裂少しも要領を得ない、然るに一つの地點、中心點、即ち唯一つの場所があつて一切の事柄は此地點に於て調和せられ、心の安住は茲に得らるゝのである。

此一つの地點は何處かといふに、それは耶蘇の立場である。諸君が彼の側に立ち給はゞあらゆる困難は氷解さるゝであらう。實に耶蘇は人生を美ならしめ、道を直からしめ、夜明の光明に向つて漸々諸君を導き給ふのである。尙此事は支那人にも、大平洋の島人にも、英國人にも、亞米利加人にも其眞理たるを失はぬ。人々の要求する所は耶蘇であつて、彼等を滿足せしめ給ふ者も亦耶蘇である。彼は大磁石であつて其牽引力の强大なる何人も彼に及ぶものはない。吾等が彼を人々に提供せんとするや、彼は喜んで己を吾等に委せて之を成就せしめ給

ふのである。人々は彼を拒む事は出來ぬ。吾等は彼を人々に提供しなければならぬ。

おゝ主耶蘇よ、爾は我を導きて永遠に至るまで爾の僕たらんことを願ふに至らしめ給へり。願くは我を助けて爾を人々に提供せしめ給へ、かくて我をして人々に爾の驚嘆すべき引力と、饑渇を癒し給ふ力とを感せしむるを得させ給へ。

聖

靈

最後の談話
奉仕の協同
間違ふことなき力
奉仕の三位一體
最上階に生活すること
眞理の拘束
上なる聯絡

聖　靈

最後の談話

少數より成る一群の人々が橄欖山に到る蜿蜒たる坂路を攀登つて居る。主を眞中とし他の者等は、前と後とに、主の御聲が聞える距離を保ちて話をしながら歩いて居る。云換ふれば主は話して居らるゝが、他の人々は之に耳を傾け時々問ひを發して居る。斯くて彼等は綠の小山に取圍れたるベタニヤ村の對岸まで往つたが、そこに佇ずんで尙熱心に話して居らるゝ。

之は彼等が最後の談話であつた。其時に主は二つの事を云はれた。此二つの事は最後の語として一種いふべからざる悲壯なる力を有して居る。彼等は世界に一つの使命、即ち終生の使命を帶びて全世界に

往かなければならぬのである。其事は深く彼等の心に燒附られた。さりながら彼等は聖靈が彼等に來り給ふ迄は出發してはならなかつたのである。使命と聖靈の來臨との二つのものが結び付けられた。彼等の使命は之であるが、彼等が其使命を果さんが爲に往くに際し聖靈は彼等の生命となり、力となり給ふのであつた。

彼等は往くのであつて、聖靈は來り給ふのであつた。彼等が往く前に聖靈が來り給ふのであつた。聖靈が來り給ふまでは彼等が往つてはならないのであつた。それから彼は聖靈の臨在と力とを以て往くのであつた。彼等が往くことの出來るのは聖靈が共に往き給ふからであつた。彼等の往く所に勝利があつたのは、彼等が往くところに聖靈が伴ひ、彼等に倚つて働き給ふからであつた。ほんとうの仕事は聖靈が爲し給ふのであるが、彼等に倚りて之を爲し給ふのであつた。彼

等が爲す所の働に最も大切なことは聖靈の臨在であつたが、聖靈が其働きをなし給ふに最も大切なることは、彼等が之に當ると云ふことであつた。聖靈は彼等が往く時と所とに働き給ふのであつた。

是が、主が此世を去り給ふに當り計畫された世界的奉仕の新しき惠ある協同事業であつた。彼等は耶蘇のことを人々に話すのであるが、聖靈は人々の戸を開き、彼等を護り、彼等の舌を導き、耶蘇の音信を人々の心中に燃ゆる火たらしめ給ふのであつた。

是より先き、耶蘇は聖靈に就いて弟子等に種々と告げられた。當時彼等は主が云はれたる此事は、將來彼等に取りてどれ程の意義を有するものなるかを知らなかつた。さりながら主が往かれたる後に之を思ひ起し、始めて其意味を悟つたのであつた。即ち彼等が世の群衆に臨むに及び、主が云はれた事柄の深意義をさとるに至つたのである。

主が賣さるゝ夜、樓に於て、又エルサレムの町に於て爲し給へる彼の最後の談話は聖靈に關する敎訓に滿ちて居つた（約十四―十六）。其次に、復活の夕彼等が樓に集つて居つた時に主は强く氣を噓きて『爾曹聖靈を受けよ』といはれた（約二十ノ十九―二十三）。橄欖山の坂路に於ける最後の御言葉は聖靈の來臨を待つべしといふことであつた。主は彼等が聖靈に全く信賴を置かなければならぬといふことを感銘せしめ給ふたのである。

奉仕の協同

耶蘇は此事に就いて彼等に語り給ひし事を自ら例證し給ふた。彼は宣敎的使命を帶びて來られ、吾等が主によりて遣はされたるが如く、彼は父より遣はされ給ふた。之を思ひ出す每に崇敬の念を益々深か

らしむる事は神なる耶蘇が人生を取り給ひし日に當り、彼は全く聖靈の指導に己を委せ給ふたことである。聖靈は主の生涯並びに其凡ての活動に於ける主要なる元素であつた。彼の敎も行動も皆聖靈の暗示、指導、統御する所であつた。言行に於ける、癒に於ける、死者を甦らすに於ける、又全く己に勝ち給ふことに於ける力は皆耶蘇の上に又耶蘇の內に働き給へる聖靈の力であつた。

主は此世を去らんとし給ふに當り『父の我を遣はしゝ如く我も爾曹を世に遣はす』といはれた。又之に添へて『爾曹聖靈を受けよ』と云はれ、此所で氣を噓き給へる事は深き意味の存することであつた。吾等は全く聖靈に賴ることゝ、又我が內に在す聖靈の力を確信することに於て耶蘇に習ふべきである。

其後今日に至る迄、之が世界的奉仕に對する有効なる協同となつた、

即ち人々と聖靈と。聖靈と人々との協同であつた。若し諸君が人の側から考ふれば『人々と聖靈と』と云ひ、神の側から云はゞ『聖靈と人々と』といふ。此二つのものは相伴ふものである。人々が往かなかつた處に於ては、聖靈の働も之が爲に妨げられた。聖靈は語り給ふたが、耶蘇に倚る救の物語は徹底しなかつた。つまり其物語を語る聖靈の代辯者が缺乏して居つたからである。之が聖靈の働を妨害したのである。

人々が聖靈を持たずして、即ち聖靈の御指導に自らを始終委せ奉らずして往つた場合には彼等の事業は失敗に終つた。是れ恰も薪を重ねて火をたく準備は出來て居つても、火が點ぜられぬが如きである。熱もなければ、火の効果もない。薪を燃さんとせば焰がなければならず、火焰を作らんとせば石炭がなければならぬ。此二つのものは、奉仕

の協同者である。

此協同事業は人々を導くといふ世界的奉仕の事に特別に必要である。誰が最も聖靈の臨在を必要とするかと云はゞ、それは人を耶蘇に導かんとするものではないか。又人を導くものにして聖靈の臨在を最も要求するものは誰であるかといはゞ非基督教民族の間に働く所の人ではないか。之に反して聖靈の臨在と力とが常に彼と共に在し、彼に倚りて働き給ふことを確信することが出來る人がありとせば、それは世界的使命を果さんが爲に外國に往つた人である。

其人は直接に耶蘇の命令に服從する部類の人である。聖靈は耶蘇に遣はされ、耶蘇の望に從つて吾等に來り給ふのである。人と聖靈との二つのものは其目的に於て一つである。其人は何處を向いても、惠に滿てる、敵することの出來ぬ聖靈の力に己を任せるのである。聖靈

と云ふ目に見えぬ協同者に信頼することを學んだ人は最も恵まれたる人である。

間違ふことなき力

吾等が絶えず記憶しなければならぬことは、主として依頼すべきものは、組織でも、方法でも、個人的才能でも、個人的修養でもなく、唯之等のものに倚りて働き給ふ聖靈である。人間が考へたる機關が整へば整ふ程、其方法が改善されればされゝ程、個人的の賜があればある程、又人の能力が訓練されればされゝ程、益々聖靈の御指導の儘に御用を務むることが出來る。記憶すべきことは、力は皆聖靈より出で、吾等を通じて働くものであるといふことを深く覺り、それが我が内に本能となる迄努力することである。聖靈ばかりではなく、又吾等ばかりでもなく、

兩者が一所に、只聖靈をして其大部分―實に眞なる部分を占めしむるのである。

聖靈は二重の働をなし給ふ、遣はさるゝ吾等のうちに働き、又吾等が遣はさるゝ人々の上に働き給ふのである。吾等の内にありて、聖靈は耶蘇の品格を造り出し給ふ。聖靈は御言葉を開き其意味を判明と現し給ふのである。聖靈は其最良の働きをなさんが爲に人心を覺醒し給ふ。聖靈は吾等の思想を指導、暗示、統治し給ふて、吾等の意志決定に伴ひ、吾等の行爲に伴ひ、人に對する吾等の行動に伴ひて吾等を導き給ふ。小さい事柄に於ても、關係する所至つて大なる事柄に於ても聖靈は導き給ふのである。

其當時に於ては、聖靈の指導を少しも知らずに居るが、聖靈は其輕き御手を吾等に伸ばして靜かに又巧に導き給ふたといふことを後から

覺ることも間々ある。忙がはしく働くに當り吾等はそれに追はれ、多少疲を感じ、又疑を起すやうな時に、聖靈は此窮迫を脱し、望む所の事柄を成就すべき思想を靜かに且つ速に暗示し給ふのである。聖靈は吾等に力を與へ、給ふて吾等に倚りて働き、吾等のなす所に倚りて働き給ふのである。諸君が人と會話を交換する時に當りても、又は公の席に於て演説する時に當りても聖靈は諸君がいふ所のものゝ内に働き給ふのである。

聖靈は吾等が往く所の人々の上に働き給ふ。彼は人々の戸を開き給ふ、吾等を拒まんが爲に閉たる戸、而も二重に閉たる境遇の戸を開き給ふ。彼は更に硬く鎖られ、開くに困難なる人々の戸を開き給ふ。彼は人々を導きて親しく吾等に好意を表はさしめ、又吾等の音信に耳を傾けしめ給ふ。彼の接觸により音信は焔の舌となり、燃え立ち、柔かに

なり、鎔解し之を受くる者の、内なる人を新たなる形に鑄造し給ふのである。

石切職工は石切場に於て、硬い石を割らんとするや、其石に穴を穿ち之に鐵の楔を嵌め玄翁を以て楔を打込む。それでも石が割れない事がある。鐵の楔も大な玄翁も頑固な石に對しては何等の効力もない。すると此度は外の方法を取る、即ち穴より鐵の楔を取り出し、硬い木にて造れる小な楔を取り、先づ之を水に浸し其儘之を穴に入れ更に穴に水を注ぐのである。玄翁は用ゐない、用ゐたら木の楔は粹碎するのみであらう。

水と楔とが仕事をするのである。濕めつた木は脹れる、いかに硬い石の心でも此壓力に堪る事は出來ない。鐵の楔や玄翁を以て割るよりも時間はかゝるが、暫く經つと石は負けて割れてしまう。水が木に

働き、木が更に石に働くのである。鐵の楔は仕損ふ事があつても木と水とは決してない。

計畫を立て、其計畫に依賴するは吾等の本性の一部のやうに見える。計畫は大に爲になるものである。されば必ずしも計畫を少なくする必要はない、併し吾等が計畫するに當りては、聖靈の柔かにして、音なく又拒むことの出來ない力にもつと賴ることを學ばなければならぬ。

奉仕の三位一體

偖て充分に力を發揮せんとせば三つの事が大切である。奉仕の三位一體即ち神一人三一と云ふことがある。此働があつて始めて充分な結果が生ずるのである。されば苟も人を導くの模範者たるものは此三位一體を深く信じなければならぬ。

第一のものは音信である。先づ福音をよく了解することが必要である。それが導くものゝ音信である。之を用ゐて彼は直接に人の心に近づき、又それを包圍するのである。之は簡單な音信であるが、大抵の場合に於ては、惜いかな之を話す人々は僅かに之を會得して居るに過ぎないのである。

人々を導くに當り、最大の能力を發揮せんとする人は其音信を明瞭委細に了解しなければならぬ。罪に關する初歩の簡明なる敎へより、罪を其往くがまゝに放任すればそれが到達する所の悲慘なる結果に至る迄。或は耶蘇が十字架の上に成就されたる罪に對する犧牲に於て最も鮮かに示されたる愛の貴き敎訓、罪と全く絶縁し、耶蘇を救主とし、主として全く之に任するの必要、心の内に聖靈が働き給ふこと、及び人々の間に奉仕の生涯を送るべきこと―之等の單純な音信を先

づ明瞭委細に會得しなければならぬ。之が奉仕の三位一體の第一要點である。

第二の點は尙一層大切なことであつて此第一の點と相伴ふ。即ち此音信を體得する所の人である。福音の物語を知り、之を話すばかりでは足らぬ、之を生活に現はさなければならぬ。之が福音を語る最良の法である。人は自ら語る所の眞理の生きた手本とならなければならぬ。彼は自ら作るべき手本を作つて居らぬを自覺して居るかも知れぬ。最も熱心なる人は自分が立派な手本を作つて居るとは考へて居らぬ、却て哀れむべき手本を示して居ると考へて居るであらう。是當然のことである。特に人を導かんとするに當りてはそんな事を考へないで、只耶蘇のことゝ人々をして彼を知らしめんことにのみ氣を奪はれて居るものである。

人は音信以上である、彼が音信よりも小なる場合に於ても此事は眞である。自らいふ所の眞理を生活の上に現はさない時に於ても、人は音信以上である。何故かといふに生命は口の先きに優るものであるからである。人が語つて居る間にも、其人の生活は彼の言葉を割引し、其内にある力の幾分を殺ぐのである。聞く所の人々が必ずしも之を比較をするといふ譯ではない。其人々は話す人が其音信を體得するや否やを知らないかもしれぬ。

予がいふは、眞實なる所の生活は語る人に力を與へ、又其言葉に力を與へるといふことである。つまり音信は其人の性質を述ぶるのである。或人の話は火を燃し、他の人のは却て之を消す。聞くものは通例何故であるかはわからないが、只そう感ずるのである。日曜學校の教室に於けると、組會に於けると、說教會に於けると、人と談話を爲すと、

手紙を書くことに拘らず、一種美妙なる何物かゝ吾等より發出して吾等が傳達する音信の力を左右するのである。

此一種の或ものは吾等が言ふ所のものよりも大なる力を有するものである。それは聞く人に眞理を打込み之に火焔を觸るゝかも知れぬ。又は却て本來眞理の内にある火を消す所の冷風であるかも知れない。斯く人はいつも音信以上である。

最上階に生活すること

第三のものは、音信よりも、人よりも、亦此兩者を結合したものよりも更に大切なものである。それは音信を體得する人を指導する聖靈である。人を指導するとは人が聖靈の御指導のまゝに全く己を委せ奉ることである。又一歩進んで己が内に聖靈の臨在を常のことゝせんが爲に修養することである。

吾等が人との友情を養ふと等しく、聖靈の臨在と親交とをも常に養はなければならぬ。常に密室に於て獨り聖書と共に時を費さなければならぬ。單に聖書を研究し其内容に通ずるといふことではない。それ以上の事―聖書の眞理を默想し、咀嚼し。此不思議なる書籍に己を開きて其峻烈なる刺激と光明とを與ふる感化力に全く之を任せなければならぬ。聖靈は聖書に倚りて語り給ふのである。然るに多數の聖書研究者は文字以外に、深く進んで研究することをしないといふことは悲しむべきことである。かゝる研究者は文字により、又其裏面に在りて語り給ふ所の人格を認めず、又之に見えないのである。

それから靜かに聖書を手にして時を費す以上に、己が全生涯を聖靈の暗示に委せ其指導に從はしむるといふことが必要である。聖靈は

吾等の思考をも導き給ふ。吾等の思考が何等かの理由で聖靈の指導を受くるに足るまで高きに及ばざるに當つても尙導き給ふ。サムエルはダビデの一番上の兄が神の御選びを蒙つたものであると思ふた、然るに神の靈はサムエルの敏感なる耳に『否』といひ給ふた。サムエルの考へは聖靈の導きを受くるに足るだけ敏捷なものではなかつた。サムエルは己が思考を更に高等なる力に從はしめなければならぬことを悟つた。

或時パウロは東の方ビテニヤに往くのがよいと思ふて將に出發せんとした。さりながら、神の靈は反對に西の方に往くのが神の旨であるといふことを明かに知らしめ給ふた。若しパウロの考が始めに於て聖靈の導きに一層深く觸れて居つたならば間違つた考を起すのではなかつたらう。そこで彼は直ちに從來の考を振捨て神の導きに從つた。彼は吾等凡庸の徒に比すれば遙かに賢明であると云はなければならぬ。

吾等の頭腦が明晰なれば明晰なる程、知識を有すれば有する程、判斷が正確なれば正確なる程―神の靈は、吾等が心を開いて之を迎ふるに於ては、此自然の道に倚りて其御計畫を吾等に現はし給ふのである。吾等の思考力よりも更に高尙なものがある。それは靈覺である。心意作用は頂上に位するものではない、之は最高層、即ち靈の境地に達する一階段に過ぎぬ。

立派な能力と教育と獻身的の考とを有する人でありながら、心意の階段にのみ生涯するが故にいつも失敗して居る人がある。此人々の行爲は心意作用より出るのであつて、更に高尙なる上よりの導きに從つて居らないのである。されば此運動の總指揮官たる聖靈は思ふが

まゝに其人々を用ゐ給ふことが出來ないのである。

彼等は高尚にして一層廣き奉仕に至らしむる敏感なる內耳を有たないのである。であるから下層の平面に齷齪として居るのである。勿論聖靈は彼等を用ゐ給ふ。併し精一杯に用ゐ給ふのではない。神の靈が神の音信を體得する人の上に降り其人を指導するに當り、人を導く力が始めて充分に發揮さるゝのである。故に思考の明晰なることや、學問の量や、敏捷にして平衡を得たる判斷などによるのではなくして、むしろ以上のものに依りて働き、又時には以上のものが到達するものよりも、更に高く働く所の神の靈に依るのである。

眞理の拘束

偖て是まで種々述べたことであつて、茲に關係ある事柄を呼び起すは、其眞理を更に一層明かならしむるの助となるであらう。今之等の事柄を回顧して次の樣な事實を擧げやう。

眞理は誰れが之を語つても惠みの力を持つて居る。惡人が福音を說いても、眞理は人を感じさせるかも知れぬ。眞理には之を通達する中間者を離れて生命がある。惡人でありながら其人の働がよい結果を示したといふやうな場合は是に由て說明さるゝ。つまり眞理は之を語る人の手によりて拘束されたにも拘はらず人を動かしたのである。

眞理の知解が甚だ不充分にして一方に偏するといふ人々でも、大に用ゐられ惠みある働をなすことがある。顯著な罪惡の生活より救はれ、非常なる熱心を以て基督敎的奉仕に入つた人が偉大なる力を有するは著しいことである。其人はある方面の眞理のみに力を入れて說

くかも知れぬ、併しながら自ら實驗したことを語るのである。即ち語る所の眞理の生きた手本となつて居る、されば其人より出る所の眞理は其人の生活の非常なる推進力を有するのである。さりながら此人の働の範圍は狹きを免れぬ。

又耶蘇の貴き福音を明かに且つ周到に會得して居つて、之を人々に明瞭に委細に語ることの出來る人々もある。さりながら惜いことには其人々は學校時代に包裝れてゐた心意の襁褓に拘束されて居つて、聖靈の指導のまゝに自由自在な働が出來ないのである。

それから又神の靈が何人をも用ゐず單獨に働き給ふこともある。神の靈は自然の美と力とに倚りて語り給ふ。神の靈は人々の內心に語り給ふ。彼はいつも、到る所に、直接に人々に語り給ふ。さりながら之等の場合に於ける音信は局部的である。自然界に於ける、また良心

に於ける神の直接の啓示は制限を受けたる啓示である。神の十全なる啓示は耶蘇によりて與へられた、それは耶蘇を示す此聖書の內に存して居る。

神の靈は、聖書が知られて居る所に最も委しく語り給ふのである。彼は聖書を生活に現はす人によりて最も委細に又充分に力を發揮して働き給ふのである。此聖書の文字は勿論聖書のいかなる部分にても、人々の心に聖靈を自由に入らしむるのである。此聖書を、自分の生活といふ國語に、新たに飜譯する人は聖靈に向つて戶を廣く開く人である。

之等の以上三つのものがどんな風に結合して居るとも、之に依て神の貴い力は多少示され又感せしめらるゝであらう。眞理が體得されず、或は却て拘束さるゝ場合、人々が認めたる眞理を體得するも其知

識が至つて狹い場合、多の知識を有するも之を實行に現はすことが少なき場合、人々が周到なる知識を有するも神の靈の指導に充分從ふことを學ばざる場合、神の靈が、耶蘇の知られて居らぬ處に於て、何人の助けをも借らずして話し給ふ場合、之等いづれの場合に當りても生命の力は人々に到るのである。

さりながら、溢るゝばかりの力が大河の流るゝが如く奔るには三つのものが一つにならなければならぬ。即ち委細にして明瞭なる音信と、之を生活に現はす人と、此音信を生活に現はす所の人を聖靈が捕へ且つ指導する事とが奉仕の三位一體であつて、之によりてのみ大河は流れるのである。

上なる聯絡

大河の流るゝが如く來る、此貴き力を受くるは左程六ヶ敷ことでもなからう。日々に靜思の時を守り、戸を閉ぢて、唯主と共にあり、聖書を開き膝を曲げ、意志をも屈げ、しかも正直角に屈げ、心を開き之を平に爲し、內なる精神を穩にし、廣く思慮を盡して讀み、敏捷明晰なる瞑想を事とし、聖書の標準に從つて己が生活を嚴格に律し、聖靈の臨在と信仰とを養ふことを計る、之等の事を日々に努めて第二の天性を造るのである。

それから『其腹より活る水川の如くに流出べし』との約束が成遂げらるゝであらう。人々はいつも屹度川に惹き付けられて居る。さりながら力が滿ちてゐても之を知るの力は充分でない、それは『朝』にならなければ解らない。

數百年來、人は水の中で仕事をする爲に潛水器と呼ばるゝものを用

ゐて、普通に出來ない事をして居る。人は永い間水の中に生きて居る事は出來ない。上手な海女でも數分間水中に居らば、又上つて空氣を呼吸しなければならぬが、其仕事は危險であつて又難儀である。所が此潛水器に依つて、人は水の中に數時間に亘りて生活し又働くことが出來る。

潛水器は倒まにした大な釣鐘のやうなもので、其重量で獨手に水に下るのであるが、下の方は空いて居つて、其内にある人は水に接して居るのである。されば溺死の憂は髪の毛一本に縛れて居ると云つても可いが、而も安然である。此器はつまり水と空氣とは同時に同處を占むることが出來ぬといふ簡單な原則に基いて造られたのである。空氣が鐘に一ぱい滿ちて居るから水を押し出して居るのである。

併し管によりて上より絶えず新鮮なる空氣を供給しなければならぬ。其人の働の力と生命とは上なる新鮮の空氣と器との絶えざる聯絡によりて保たるゝのである。

基督者の此世に生活するや、其生來の空氣の外に活て居るのであるから、彼は自分に適應する大氣を呼吸しなければならぬ、さもなくば死を見るのみである。而も彼は上より始終新鮮な供給を仰がねばならぬ、さもなくば彼が生命は危に瀕するのである。

外國傳道地に於ける宣教師等は其地に於ける道德的空氣は實に慘憺たるものであると云つて居る、故に其子供等を幼少の時に本國に送り、印象を受け易い年齡に當り基督的生活の認められて居る本國に於て其教育を計らんとして居るのである。

此處に於けると、彼處に於けるとに論なく、吾等は新鮮な空氣を呼吸せんが爲に、上層の空氣と自在なる聯絡を保たなければならぬと云ふ

眞理は如何に絶叫するも過當ではない。

希くは神の息にして、又我等の息なる、貴き聖靈よ、我を助け、我生涯が美はしくなり、又充實されんが爲に、又斯くて主耶蘇が我を用ゐて此饑うる大群を養ひ給はんが爲に我が内に滿ち給へ。

祈禱

祈禱こそ最大の業なれ
他端に於て
毎週世界一週旅行
祈禱を常習とせよ
祈の志向
人こそ祈禱なれ
不可見的變化は常に行はる

祈禱

祈禱こそ最大の業なれ

吾等が爲し得る最大の業は祈ることである。

耶蘇は祈禱の生涯を送り給ふた、彼が爲し給ふたこと、言ひ給ふたことの凡ては祈禱より生じたのであつた。勿論此事を正確に知る道はないが、予は彼の御生涯を研究すればする程、福音書の大部分を占めて居る彼の教訓も、彼の活動も、彼の祈禱に比ぶれば至つて小部分たるに過ぎなかつたと云ふ印象を益々強くするのである。耶蘇は祈禱を第一に置かれた樣に見える、他のものは皆それより出でたのであつた。彼は世界を導く使命を帶びて居れた。之が彼の祈禱の思想となつたのである。耶蘇の個人的日常生活に於て特に力を入れ給ふたのは祈

禱であつた。

聖靈は祈の靈である。彼は主たる仲保者である。彼は吾等に祈の靈を吹入れ、發して熱情とならしめ給ふのである。聖靈は吾等に如何に祈るべきかを敎へ給ふ、而も其敎は一生涯に亘る敎である。諸君の中に敎師の任を帶びて居らるゝ方々は能く認めて居らるゝ事であると思ふ。即ち敎師に取り大切なことは敎へる事物に關する知識よりも、却つて忍耐と敎授上の手腕とである。然るに聖靈は吾等に祈ることを敎へ給ふに當り、最大の手腕と愛に富める忍耐とを以て之を爲し給ふのである。

聖靈が爲し給ふことはそれのみではない、彼は吾等銘々を其祈禱となし給ふて、吾等の內に臨み、口にすることの出來ぬ悲を以て、吾等が未だ學ばざるの祈、而も此地上に於て祈らなければならぬ祈を爲し給ふ

のである。人を導くと云ふ大事業に必要なる凡の力は聖靈のうちに在り、又彼より來るのである。聖靈が特に力を入れ給ふ事柄は祈禱である。

吾等銘々が爲し得べき最大の事は祈である。吾等が遠國に往つて働いたとしても一地方に定住しなければなるまい。然るに吾等の傳道區域は全世界である。どうして自分が全局に亘つて親しく働をすることが出來やうか。所が、それは祈禱で可能る、而も有効に可能る。吾等が遣はされた所は內國であらうと外國であらうと、つまりそれは吾等の策源地である。吾等が手づから接觸すべき地である。それだけでも澤山だが、それればかりではない。それは吾等の活動範圍の一小局部に過ぎぬ。實に吾等は此策源地より、祈禱の密使を全局に亘り各方面に向つて派遣し得るのである。

又吾等が一定の市、町、村に遣はれて其處に働いて居るに當つても、當然個人的活動に先立つものは祈禱である。加之祈禱は活動と並行し、又之に續くべきものである。親しく人に接觸して及ぼす所の力は非常なものである、然るに此大なる個人的接觸よりも更に大なるものがある。それは祈禱の力である。

人格の力は祈禱に倚りて最大最良の働をする。其人が居つても働は一向發展せず、却て妨となることがあるが、之は大概祈禱が缺けて居るからである。人々の間に立ち親しく奉仕の生活を送つて、之が美はしき効果を奏する所以は一に密かなる祈禱に由るのである。

金を寄附する者は、之に添へて、それ以上の祈禱を以てしなければならぬ。金は殆んど全能のやうに見える。併し人を導く力としては、金は勿論個人的奉仕に劣ること多大なりと云はなければならぬ。金が

殆んど全能の働を爲すは人が之を働かすからである。個人的接觸をして力あらしむるものは祈禱であるとすれば、況んや金をして力あらしむるものに於てをや。祈禱を伴はしめずして、宣敎事業に寄附した る金でも色々善事を爲すに至るは疑はれぬ。併し之を祈禱の靈力電流が通つて居る金と比較すれば實に貧弱見るに足らぬものと云はねばならぬ。

他端に於て

一日予はシンシナタ州に開かれた男子基督敎宣敎大會に出席の途上にある二十人計のピッバルグ市の人々の一團に邂逅したことがある。そのうちに二三人の牧師も居つたが、大多數は實業家連で、鋭敏にして抜目のない、模範的亞米利加實業家であつた。彼等は四方山の

話に花を咲かして居つた。

其時、**祈禱は果して働を爲すだらうか**と云ふ問が發せられ、色々な說が出た。その一は斯うだ、假令へば夜寢に就くに當り、自分の室に入り聖書を讀み跪いて祈禱をする。漢口か、ピッツバルグかの或人の爲に祈つたとする、したら予が祈らなかつたと異つた何事かゝ漢口かピッツバルグに生起するだらうか。勿論祈禱は自分の爲めになる。神の前に膝を曲げ、頭を垂れ他人の爲めに、又自分の爲めになるやうな良い思念を心に浮べる―之が自分に良い感化を及ぼすのである。

併しそれ丈の事であるか。他端に於て何事をも爲さぬであらうか。予が祈つた事は漢口に於て何事かを爲さぬであらうか。もし實業上の手紙を書き之に外國爲替を入れて漢口に送らば此手紙は用を辨ずるのである。此方法によつて許多の商賣上の取引が行はれて居るが、

祈禱は手紙と爲替とのやうに實際何事かを爲すであらうかと。

以上の如き事に關して問ひつ答へつ仲々話に花が咲いた。此等の人々は矢張他端に於ても何事かゝ生起するものと信ずると云ふを聞いて予は興味を感せざるを得なかつた。此人々は堅い敎を奉ずると知られたる敎會に屬する者であつて、又正統派敎會の都として知られたピッツバルグの人々であつた。祈禱の力が他端に於て働きを爲すものであると云ふ極切つた事が此實業家連の首肯する所となつたやうに見えた。見かけた所では其人々はこんな風に祈禱を考へて居らなかつたやうであつた。併し今はそうでなければならぬと頷いた。そこで次の問が起つて來た、即ち此他端に於ける外國の仕事を吾等は何程やつて居るかと。斯く此一團の人々は滊車が一時間四十何哩の速力で走つて居ると共に其談話を進めた。

祈禱は仕事をする。祈らなかつたならば起らないことが祈に由て起るのである。銀行家が自分の椅子を離れず、机の前に手紙を擴げ、ロンドンとか、パリとか、上海とか、カルカッタとか、東京とかに觸るゝ事ができる。其通り、祈禱をする人も、己が室に在りて地圖と聖書とを擴げて跪く時に之等の諸市に觸るゝ事が出來るのである。

それ等の土地に於て必要な變化が起る。銀行家は自分の住んで居る都に於て、又其本國に於て仕事をして居る。さりながら多くの場合に於ては、本國や己が町に於けるよりも、遙か澤山の取引を外國でやつて居る。其通り、吾等は人々の魂を導き、又世界を導くに當りて、外國に於ても亦內國に於ても、大きな仕事を爲たいものである。

毎週世界一週旅行

予は茲で『仕事』と云ふ言葉を周到な注意と敬虔の念とを拂つて使ふのである。祈禱には普通の仕事に入らないやうな神聖なものが入つて居ることは勿論だ。吾等は思想の上に於て此二つの事を別けて居る。一方は普通の事とし、他の一方は聖い事として居る。可能ることなら予は敬虔の念を更に祈禱に加へたいと思つて居る。さりながら祈禱の結果を談ずるに際し、商賣上に使用する日常の語を以てするは得る所が多い。

祈禱は神の爲めに仕事をする事である。斯く考へるは實際的で、手に取るやうな、直接に觸つたやうな感じを與へる。されば吾等は外國取引を增さんが爲めに直樣其計畫に取掛らうではないか。

諸君は祈禱の指南として簡短な表、又は備忘錄を作るが可からう。敢て六ケ敷、管々しい規則などを設けて、之を怠るは不正實であるなど

と云ふ感じを與へるやうなことを爲るのではない。只日々に一見して諸君の考を導く助となるやうなものを云ふのである。

一週間に亘つて使はるゝやうな僅かの覺え書を作るのである。即ち一週間に世界を一週するやうに計畫することが出來る。予が用ゐて居る小い表は日曜日から土曜日に至る一週の各日に別けられて居る。毎日一枚を見るやうになつて居る。それに注意すべきこと、暗示的の言葉、私用、家庭に關すること、友人のこと、教會のこと、約束、其他之に類することを記して置く。それから又一週の毎日に當る一頁があつて、それには內國の事柄、外國の事柄を書いて置く。

一週間の世界旅行を記するに當り、何處から始めやうか、主は弟子等にエルサレムより始め、それから働を擴むるやうに告げられた。此規則に從ひ予は日曜日を土耳古國並に其近隣なる亞剌比亞と波斯とに

あてる。それより最大の要求を示す磁針の方向に從ひ、東方に進む、月曜日は印度の日であつて、其內にセーロン其他之に接近する諸國諸島を容れる。火曜日は支那の日、水曜日は日本並に太平洋の諸島とする。

これで太平洋を横ぎり木曜日には南亞米利加、墨其西哥を當てる。東に進み太西洋を横ぎり、再び亞弗利加に歸つて來るのは金曜日である。土曜日には更に進んで歐羅巴の天主教諸國並に露西亞に到り其週の世界旅行を終るのである。本國に於ける祈禱の題目も同じ樣に一週の各日に割當てるのである。

如此種類の小さい祈禱書は、用ゐるに從つて大きくなる。宗教上の新聞雜誌などを讀んで感じたことを書き加へたり、人々の名を入れたり、將に開かれんとする大會の期日、其他之に類することを記載し、或は

日々聖書を讀むに當りて注意を引いた聖書の句などを記入する。斯の如くして此覺書は諸君が貴き聖書の間に差挿んで置いて價値ある小冊子となるのである。

世界地圖を所有しなければならぬ。日々に世界地圖を一見し、其日に割當てゝある地方を瞥見するは大なる助である。かくせば別に骨を折らずに國々が心の内に刻付らるゝに至り、漸々益々明晰になり、いかにも判然と感ずるに至るのである。

其地圖は諸君に貴重なるものとなる。何故かといふと諸君が感化を與へて居る地方を一目の内に收むるに可いからである。それが諸君の祈の航海圖となる。それは美はしき記憶の清香を放つやうになる。諸君が聖書に於て獨り神と共にあり、又神の世界の此地圖に於て神と共にあつたといふ經驗は諸君の回顧をして爽快ならしむるので

ある。

祈禱を常習とせよ

パウロが言ふた『絶えず祈るべし』との一寸した言葉は予を惑はし且つ苦しめたことがある。併しそれは大に予の助となつた。何故に予を苦しめたかと云ふに、それは實際に出來ることではないと思ふたからである、或人々が考へるやうに祈禱を始終繰返して居ることとは思はれぬ。又永い時間に亘つて跪いて居ると云ふことでもあるまい。予は其意味を知らんと祈禱によりて求めたる結果、祈禱は予に取りて次の四の意義を有つやうになつた。其外にも意義を發見するやうになるかも知れぬ。

第一に、祈禱は常習とならなければならぬと云ふことである。毎日

時を定め、離れて獨り祈るのである。それには聖書を携へ之を精讀する。之はつまり神に聽くのである。祈る時には之を先にすべきである。先づ神に聽いて、然る後に神に話すのである。聖書を讀むには或は急速に廣く、或はゆつくり時を費し、更に瞑想を加へても可い。何れにしても瞑想の常習を養ふやうにしなければならぬ。

聖徒等が實行したことであるなどゝ考へて、其眞似をしやうと、眠い目を擦つて努めるやうなことではならぬ。寧ろ言葉の意味をよく玩味し、之を自分の日常生活に當嵌んとするのである。且つ祈るのである。神の前に靜座し、目標を一定の事物、人々、場所に置いて之が爲めに祈るのである。此習慣は積んで第二の天性となるに至るであらう。之が諸君に取り一日中の樂い時となるまで養ふことが出來やう。

祈禱の志向

祈禱の常習が日々に蓄積すれば一種の態度、即ち志向となる。斯うなると何事が起つても祈禱を思ひ起さしめる。諸君の志向は日常の事に當り、事物が生起するに際し、祈を求める。勿論仕事を止めることは出來ぬが、働く間にも祈禱を思ふのである。手が忙はしい時にも心は祈るのである。

予は此方法によつて祈ることを敎へられた學校を忘るゝことは出來ぬ。家庭に永引いた病人があつて、一時予は親しく世話を見なければならなかつた。人手を借りてはとても自分で手を下すやうに行かなかつた。どうかして生命を取留めんと他の一切の事は眼中になく日夜を別たず、ひたすら看護を盡した爲、早朝の聖書を讀み祈禱を捧ぐる定めも、其他日常の定つた事と共に破られてしまつた。

さりながら予は看護を努めて居る間に自分で絶えず祈つて居ることを發見した。時には甚だつかれ悲觀せざるを得なかつた。併し凡てのことは神の御手にあることを認めた。されば別に計畫することなしに絶えず祈をする習慣が生じた。予は人と話をしたり、何か大切なことを一生懸命考へたりして居つても、尙祈の流は胸底に絶えず走つて居つた。予は此苦しい經驗を感謝することをやめることは出來ない、なぜかといふに此間に祈の志向なる此新しき習慣が出來たからである。

諸君は日常の定まつた仕事に從事して居る間にも、思想の底流が絶えず流れて居ることに氣が付かれたことはないか。諸君が話をしたり、讀んだり、書いたり、更に何か機械的の仕事に從事するに當り、それ等に頓着なく下底にある思想の流はひとりでに常に流れて居る樣に見

える。諸君が一層細やかなる注意を要する仕事に從事するに當りては此流は時々妨げられ、或は其意識を失なふかも知れぬ。さりながら諸君が再三再四反覆して殆んどひとりでに爲さるゝといふ樣な常習的の事に從事するに當りては直ぐ此事が見らるゝのである。

予は往年、一時銀行に務めて居つた時に長い加算をしなければならなかつた事を記憶して居る。時には加ふべき數の高さは一尺位のものであつた。併し漸々慣れて來てから、計算をして居る中にも自分の思想は遠方にあつて全く外のものに奪はれて居ることを發見して度度驚いたことがある。それに氣がつき間違てはならぬと心配して、もう一度念を入れて計算をして見ると少しも違がつて居らないことを發見したのである。加算の常習が出來上つて、思想の底流を自由ならしめたのであつた。

其底流は心情の目的或は心意の傾向を示すやうになるものである。何事か諸君が深く心を注ぐ所のもの、最も凝つて居る所のもの、又は性癖となり、嗜好となつて居る所のものなどが、知らず〳〵の間に思想の流れとなつて現れ易いものである。さて此事は修養することが出來る。之を修養する主なる途は先づ生涯の第一目的を確立し、斯くて底流を指導して一方若くは他方に向はしめ、尙之をして其方向を保たしむることを努むるにある。若し耶蘇が諸君の心を收攬し給ふたならば生涯の目的は彼の爲に生るといふことゝなる。而して若し諸君が祈の非常なる力を認め給ふに至らば、思想の此底流を祈の流となすことが出來るであらう。

之は力を盡して斯る底流に自我を保たんが爲に無理に又機械的に努めて、若し怠つたならば自分を心の內で鞭打つといふ意味ではない。

凡の行爲の力といふものはそれが全く自由で自然な所に存するのである。諸君は耶蘇の如き心情と、終生の目的と、祈の習慣とを修養することが出來る、而して之等の凡てのものは祈に向ふ思想の底流を訓練することになるのである。

物品發送係は荷造りをして居る間にも祈の此流を發送することが出來る。釘を打つて居る間にも心の內で『今日は支那だ』といふのである。鐵鎚を擧げて叩く度毎に『今日は支那だ、—主よ漢口の宣敎師等を今日惠み給へ。其所に居る何の誰君を、—今日耶蘇の名に於て勝利あらしめ給へ。—醫療に從事する宣敎師等、看護婦等、—彼等を助け給へ—其國の敎役者を助け給へ』と心の內に祈を打ち出すことが出來る。

心の目の前にあの小さな祈の覺書がちらつく、支那の地圖は祈禱の

時にそれを眺める練習を爲した長短に應じて、明かに又はぼんやりと目の前に現はれる。彼の心はひとりでに一點より他の點に走るが、祈の底流は始終流れて止まぬ。何か新しい、又特別に心を勞する務があれば、此流は破らるゝが、間もなく又自由になる。斯くて遂には彼に取りて之は全く自由なるもの自然的のものとなる。之が『絶えず祈る』といふ意味の一端である。

人こそ祈禱なれ

次に祈禱は生命である。生命とは諸君が自我として如何なるものなるかをいふ。生命は只幾年の間か生きて居つたと云ふ其期間を云ふのではない。諸君の思想と、愛と、大なる望みと、大なる目的と、諸君が爲す所のもの、又諸君の爲人―それが諸君の生命である。そして夫は

諸君が生活する範圍に、又世界に非常に大なる影響を及すものである。

凡てのものゝ根底に於ける指導的目的となり、熱烈なる愛の力となり、憧憬の念となるものが、神に向ひ、又人に向ひ、且つ世界に向つて居るならば、それが祈禱即ち不斷の祈禱となる。諸君はさう考へて居られまい、さりながらそれが諸君の生命であり、その生命が一の祈禱である。それが惡しき者に對して與ふる所の感化並に神の爲めに及ぼす所の力は非常なものである。

之は絶えざる祈禱である。諸君の生命の有らん限り、其强力に應じて續くのである。サタンも之を懼れる、之はサタンを妨げ、彼を惱すのである。之は諸君の生活の香爐より發する香薫となりて絶えず神の寶坐の前に昇り、地上の事物に影響を及ぼすのである。

次に祈禱は人格である。云ひ換ふれば諸君自らが祈となり、即ち耶

藍の名によりて捧げられたる、生きて歩んで居る祈禱となることが出來るのである。諸君の人格は惡人を感化し、事物に變化を與へ、神の御計畫を成就し給ふ助となるのである。心の最大目的とする所が耶蘇の御目的と全く一となるまでに進み、何處に在るとも諸君が只其所に居らると云ふだけで、神の爲めに盡す大なる力なることを惡しき者は更なり主御自身すらも之を認め給ふやうになるであらう。

諸君が其處に居らるゝと云ふことが既に惡しきものゝ計畫を妨げ、遇ふ所の人に感化を與へ、神の御爲になるのである。即ち諸君の人格が及ぼす力が正に祈禱と同一なのである。諸君は無意識の內に自ら祈禱となつて居るのである。諸君の生活の態度全體が『御國を來らせ給へ、御旨の天になる如く地にもなさせ給へ』といふのである。

數年前大統領ローズヴェルトの令嬢がタフト氏の東洋訪問の際其

一行に加はつて居た。勿論彼は大統領の令嬢として往つたのではないから、何等公けの職務的の意義を有するのではなかつた。大統領の令嬢としてではない、單に一個の婦人として日本や支那を見んとして往つたのであつた。此事は他の國の人々よりも吾等米國人に取つては解り易い。

さりながら東洋到る處に於て彼は單に一行中の一人としてでなく合衆國大統領の令嬢として取扱はれた。彼の父に關係があるといふので贈物をするやら、歡迎會を開くやら、特別な待遇を與へた。東洋人に取り彼は我國の主權者を代表するものであつたから、それに從つて彼等は取扱をしたのであつた。

吾等基督信者に於ても同じ事である。惡しきものは吾等を單に吾等とのみ考へない、惡しきものに勝ち給ふ耶蘇に關聯して考へて居る。

吾等は惡魔に對して基督を代表して居る、惡魔は耶蘇を懼るゝが如く吾等をも懼れて居る。即ち吾等が主に忠なることによりて惡魔を恐れしむることが出來るのである。

祈禱の最後の目的はサタンを陷れ、神の聖旨を成就することである。吾等の人格により、又單に吾等が其處に現在すると云ふことによりて之を爲すのである。祈禱は人格である。諸君銘々は祈である。人は惡しき感化力を相殺し、人々や事物に變化を起さしめ、神が御計畫を成就し給ふ其助となるべき偉大なる祈禱となるのである。

前述の最後の二つのもの即ち生命と人格とは無意識の祈禱と稱んで可からう。吾等がそれに氣が付かずに居つても感化は絶えず及んで居る。此祈の力が絶えず吾等より發出して居ると云ふは大に吾等を勵ますものではなからうか。且つ之等の二のものは吾等が居る場

所に限られて居るものではない。之等のものは吾等が心に思を浮ぶる毎に又口に祈の言葉を發する毎に動力となりて目的の場所に到り彌増りたる勢を以て働をするのである。靈の感化力は距離の制限を受るものではない。

不可見的變化は常に行はる

之等の祈は他端即ち目當とした場所に於て變化を生起せしむるものである。是に由て北京に於ける事物が變化を起すのである。此等に倚りて、印度に於て其國人が讀んで居る一冊の福音書は其人に一層解り易い書籍となる。祈禱は靈の力であつて、諸君と諸君が祈の目標を置く場所との距離を瞬く間に疾走る。之がなければ起らぬ事柄が是に由て起るのである。

祈禱に由て反對は輕減せられ、困難は退けられ、道は開かれ、光明は與へられ、文字の上の眞理は其字體を劃大明瞭になされ、健康は恢復せられ判斷は正鵠を失はず、目的とする所は益々確實なるものとなり、かくて人は誘惑の荒波を排して安全に航海することが出來るのである。

事物は生起する、其生起する譯は何かと云ふに、それは殆んど人目を引かぬ平凡の若い人が釘を打つたり、宛名を書いたりする傍、又は寫字者が寫字機を叩いたりしながら、靜かに祈るから、取も直さず殆んど思想の上に登らない意識の底流に於て、やさしく祈禱をするからである。

金

制限

最良の協同

耶蘇の教

自分自身の處理者たれ

主の御意を取り損ふて居る

金は語る

負債

銹た金

吾等は友の信任に對して忠なりや

金

制限

金は殆んど全能の力を以て居る樣に見える。金があれば砂原に花を咲せることも可能れば、死をも防ぐことが出來る。これで大學を建設し、書籍と諸機械とを購入し、善良なる敎師と勤勉なる學生とを集めることも出來る。或は完備したる病院を造り、或は敎會を建てゝ有力なる說敎者を招聘することも出來る。金の力も亦大なりといはねばならぬ。

今特に我米國に於ては金の力は無限であると思はるゝやうになつた。金の價値は實際過大にされてゐる。多くの人は予が冒頭に用ゐた言葉を改正して『金は全能である』と讀むであらう。予が注意し

て『殆んど』と『見える』と云ふ言葉を用ゐたのを無視してしまう。

然るに金は大なる制限を有つて居る。此制限とは如何なるものであるか、之を知るの利益は多大である。吾等の多數は此事に關して其頭腦を掃除する必要を有して居る。金といふものは、それ自身に於ては無用なもので何の役にも立たぬもの、所謂無用の長物である。之をして價値あらしむるものは人間である。吾等が之を用ゐ、吾等が其價値を考へるから價値が生ずるのである。金が苟且にも何かの役に立たんとすれば人間の協同者を待たなければならぬ。

それが惡い人の手に入れば實に邪惡卑劣なものとなる。此場合に於ては『殆んど』といふ言葉を使ふ必要はない。それはその創造力と交換力に於ては神の如くであるかも知れないが、其性質に於ては惡魔の如く、又惡魔の首の如くなる。

金は又此世、即ち地上に於てのみ價値あるものである。死の領内に於ては其價値は全くなくなる。されば新しきエルサレムの市街に於て之は敷石として用ゐらるゝといはるゝ。さりながら道路を敷きつめる材料として役に立つものとしやうとせば、先づ之を處理して更に硬きものとしなければならぬ。

吾等は又もう一つの事を記憶しなければならぬ、此事は凡俗が始終忘るゝことであつて吾等も亦凡俗の感化を蒙つて忘るゝ樣に誘はるるのである。それは何かといふに、金はいつも、强健にして、美はしき、清潔なる生活よりも其力が劣つて居るといふことである。諸君はそんな比較は到底執れるものではないと思ふかもしれぬ。さりながら有意的であるか、又はさうでないかは知れぬが、實際生活に於て此比較は始終取らるゝのであつて、大抵の場合に於ては金の方が優つて居ると